

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

平成23年度～平成27年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」 研究成果報告書概要

1 学校法人名 学校法人 専修大学 2 大学名 専修大学

3 研究組織名 専修大学社会知性開発研究センター／心理科学研究センター

4 プロジェクト所在地 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

5 研究プロジェクト名 融合的心理学の創成:心の連続性を探る

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
長田 洋和	人間科学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数 17 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
長田 洋和	人間科学部 教授	心理疫学からの心理学理論の検証	【研究代表者】 心理疫学に基づく実証分析からの提言
大久保 街亜	人間科学部 教授	心的不適応に対する認知心理学的アプローチ	【事務局長】 心的不適応の実証的検討と心理モデルの提案
澤 幸 祐	人間科学部 教授	条件づけ学習理論のベイジアンネットワークによる再評価	【研究推進責任者】 融合的心理学における行動学的基盤の解明
岡村 陽子	人間科学部 教授	社会機能訓練の心理リハビリテーション	社会機能訓練の心理支援モデルの提案
下斗米 淳	人間科学部 教授	自己発達・変容過程から見た社会的相互作用	社会的相互作用分析に基づく心理モデルの提案
高田 夏子	人間科学部 教授	幼児・児童の心的不適応への深層心理学的アプローチ	幼児・児童に対する心理援助の実践的評価
村松 励	人間科学部 教授	犯罪・矯正心理学への心理学理論の応用	矯正場面における心理的支援の提言
山上 精次	人間科学部 教授	身体化への認知発達のアプローチ	認知発達の検討に基づく心理モデルの提案
吉田 弘道	人間科学部 教授	子育てを中心とした心理支援	子育て支援に対する提言と実践的評価

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

石金 浩史	人間科学部 准教授	神経科学的手法による知覚メカニズ ムの解明	電気生理学的手法を用いた実証的検証
岡田 謙介	人間科学部 准教授	ベイズ統計学の理論と応用	融合的心理学のための統計学的基盤
国里 愛彦	人間科学部 准教授	臨床心理学への計算論的アプローチ	計算論に基づく臨床実践の提案
中 沢 仁	人間科学部 准教授	知覚の計算論的基礎	知覚の計算理論の提案と実証的解析
久方 瑠美	人間科学部 助教	視覚情報処理における神経科学的基 礎	視覚情報処理への計算論的アプローチ
藤岡 新治	人間科学部 特任教授	心理査定のための心理学理論の応 用	融合的心理学へのエヴィデンスの提供
乾 吉 佑	専修大学 名誉教授	精神分析的アプローチによる実践的 心理援助	心理支援モデルの実践的評価
長谷川 寿一	東京大学大学院 教授	発達障害に対する進化心理学的アプ ローチ	進化心理学的考察に基づく心理モデルの提案

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

■研究者の追加

変更前の所属・職名	変更(就任)後の 所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
—	専修大学 講師	国里 愛彦	計算論に基づく臨床実践の提案

(追加の時期：平成 25 年 4 月 1 日)

変更前の所属・職名	変更(就任)後の 所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
—	専修大学 助教	久方 瑠美	視覚情報処理への計算論的アプローチ

(追加の時期：平成 27 年 6 月 1 日)

■職位の変更

変更前の所属・職名	変更(就任)後の 所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
専修大学 准教授	専修大学 教授	長田 洋和	【研究代表者】 心理疫学に基づく実証分析からの提言
専修大学 講師	専修大学 准教授	岡田 謙介	融合的心理学のための統計学的基盤

(変更の時期：平成 24 年 4 月 1 日)

変更前の所属・職名	変更(就任)後の 所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
専修大学 教授	専修大学 名誉教授	乾 吉佑	心理支援モデルの実践的評価

(変更の時期：平成 25 年 4 月 1 日)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
専修大学 准教授	専修大学 教授	大久保 街亜	【事務局長】 心的不適応の実証的検討と心理モデルの提案
専修大学 准教授	専修大学 教授	澤 幸祐	【研究推進責任者】 融合的心理学における行動学的基盤の解明

(変更の時期：平成 26 年 4 月 1 日)

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
専修大学 准教授	専修大学 教授	岡村 陽子	社会機能訓練の心理支援モデルの提案
専修大学 准教授	専修大学 教授	高田 夏子	幼児・児童に対する心理援助の実践的評価
専修大学 講師	専修大学 准教授	国里 愛彦	計算論に基づく臨床実践の提案
専修大学 教授	専修大学 特任教授	藤岡 新治	融合的心理学へのエビデンスの提供

(変更の時期：平成 27 年 4 月 1 日)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【研究の目的・意義】

細分化された諸領域の再統合は、21世紀の科学全体が抱える問題であり、心理学においても決して例外ではない。殊、心理学は「心」を多面的に科学する学問であるが故、他の諸学問領域との融合ばかりが先行してきた。この問題意識を念頭に置き、本研究プロジェクトでは、ヒト・動物といった研究対象、基礎・応用といった研究領域にとらわれずに心理学の諸領域を融合し、境界を越えた融合的心理学の創成、および「心の連続性」の解明を目指す。それにあたり、統計モデルの作成・選択・予測という流れを統一的に扱うことができるベイズ統計学や、進化心理学の観点を導入する。また、大規模な心理疫学調査によって得られるデータをこれにあてはめることで、現代日本が抱える「こころの病」に対する臨床像を把握する。さらに、ベイズ的手法によって選択されたモデルを踏まえ、ヒトや動物を用いた基礎心理学的・神経科学的研究を行い、得られた知見を臨床現場で検討することによって、基礎と応用を接続することを目的とする。本研究は、融合的心理学の創成という戦略的研究としての意義に加え、より一貫した心理学の研究・教育へつながり、心理学の発展に大きく寄与することが期待できる。

【研究計画の概要】

1年次は、進化論的・適応的視点を導入し、融合的心理学の創成にふさわしい新たな手法の策定と、領域横断的な複数の仮説・モデルの生成を行う。2年次には大規模な疫学調査により現代日本の臨床像の実態を把握し、そのデータに基づいてモデルを構築する。モデルの評価においてベイズ的手法に基づいたモデル選択を行う。また、先年度に開発・改良した手法を用いて、ヒトならびに動物を対象とした基礎研究を行う。3年次では、得られたモデルに基づいた新たな予測を検討し、ヒト・動物の両面から実験的検討や調査研究を行うことでモデルの検証を行う。4年次では、実証的方法に基づいたモデルの評価を行うとともに、特に心理的不適応の心的モデルについては可能な限り実践的評価も併せて行い、モデルの修正や進化的適応環境などの観点からの検討を加える。最終年次では、研究の成果に基づき新たに融合的心理学を提案する。

(2) 研究組織

本プロジェクトは、専修大学人間科学部心理学科の教員を中心に構成される。同一の学科に所属しているため、日常的にも接点が多く、円滑なコミュニケーションのもと研究活動を行ってきた。また、専修大学の教員に加え、心理学各領域の「融合」をベイズ統計学と進化心理学の観点から目指すため、日本に進化心理学を導入し、現在もベイズ統計学の手法を用い言語の進化について先進的な研究を行うなど精力的な活動を行ってきた東京大学大学院教授・長谷川寿一氏を客員研究員として迎え、総勢17名のプロジェクトとして活動した。加えて本学の大学院生ら5名をポスト・ドクターおよびリサーチ・アシスタントとして採用し、それぞれが研究員の指導の下、実験補助やデータ整理などの研究補助をはじめ、積極的に論文執筆・学会発表等を行い、プロジェクトの研究に寄与した。

この研究組織を支えるため、専修大学では本学の全学的な研究開発機関である社会知性開発研究センターの中に「心理科学研究センター」を創設した。社会知性開発研究センターは、専修大学の21世紀ビジョンである「社会知性の開発」を目的に、学長直属の研究開発機関として設立されたものであり、その中で「心理科学研究センター」は、融合的な心理学の創成を通じて社会知性を開発するという目的を担っている。

心理科学研究センター内には研究代表者、事務局長、研究推進者という3つの役職を設け、さらに専属の事務スタッフを配属し、研究員が研究に邁進できる環境を用意した。研究代表は、研究・運営全体の統括を担当した。そして、研究代表者、事務局長、研究推進者と事務スタッフが、緊密な連絡を保てるよう、定期的に「心理科学研究センター事務局会議」を開催し、本研究プロジェクトの進捗状況を点検し、各種調整や諸問題への対応を行った。また、多くのプロジェクトメンバーが同一学科に在籍するという特色を活かし、学科会議などの場で研究の進捗状

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

況や事務連絡などを随時報告し、緊密な関係を保つ体制をとることができた。加えて、心理科学研究センターの研究進捗状況は、学長が統括する「社会知性開発研究センター運営委員会」において報告され、心理科学を専門としない研究者からも評価を受けることができる体制で活動を行った。

(3) 研究施設・設備等

【主な研究施設】

社会知性開発研究センター（生田校舎 6 号館 1 階）	面積：121 m ²	使用者数：17 名
心理学実験室（生田校舎 4 号館 3 階・4 階）	面積：1,100 m ²	使用者数：17 名
心理教育相談室（生田校舎 11 号館 1 階）	面積：238 m ²	使用者数：7 名

【主な研究装置・設備】

脳波測定用シールドルーム	（ヒト生理実験用，1988 年）	利用時間数：週 20 時間
行動観察カメラシステム	（ヒト行動観察用，2004 年）	利用時間数：週 4 時間
脳波計	（ヒト生理実験用，2007 年）	利用時間数：週 20 時間
多細胞活動電位同時記録用増幅器	（動物電気生理実験用，2009 年）	利用時間数：週 20 時間
超純水製造装置	（動物電気生理実験用，2010 年）	利用時間数：週 20 時間
オペラント装置	（動物行動実験用，2010 年）	利用時間数：週 20 時間
マルチパッチクランプ電気生理実験装置	（電気生理心理学実験用，2011 年）	利用時間数：週 20 時間
眼球運動測定装置	（ヒト知覚実験用，2012 年）	利用時間数：週 5 時間
筋電位・皮膚電位測定装置	（ヒト情動実験用，2013 年）	利用時間数：週 20 時間
事象関連電位測定装置	（ヒト生理実験用，2013 年）	利用時間数：週 20 時間

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

【平成 23 年度】

初年度は、融合的心理学の創成を目指すにあたり、実証科学である心理学の特性を考え、方法論の徹底的な再検討を行い、新たな方法の提案や既存の方法の改良を行った。

i. 方法論・研究手法の検討と提案

方法論の検討における最大の成果として、心理統計の新しいあり方の提案である「伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力」*1 を上梓した。この書籍では、帰無仮説検定に対する代替アプローチを提案した。具体的には効果量、信頼区間、検定力を重視する手法を取り上げた。帰無仮説検定はあらゆる心理学で用いられる伝統的なデータ解析アプローチであり、その問題点を解決する代替案を提案することで心理学諸領域に重大な貢献ができると考える。また、ベイズ統計学に基づく新たな手法の提案も行った。効果量、信頼区間、検定力を重視するアプローチは、海外でこそ取り入れられるようになってきたが、日本ではまだ普及が進んでいない。この書籍の出版にあたっては、論文の解析手法に対する文献学的調査を行い、日本の現状を再確認した。また、その成果については、第 2 回シンポジウム「心理学における効果の大きさとはつき」*2 でも取り上げ、著者である大久保研究員および岡田研究員が成果発表を行った。

加えて、ベイズ統計学のアイデアを用い、心理学における伝統的な多変量解析の手法について新たな分析法の提案を行った。具体的には、心理学研究で多用される多次元尺度構成法にベイズ推定を用いることが提案された。この成果は、心理測定法の専門学術誌である Behaviormetrika に掲載された。*3

また、古典的条件づけや随伴性判断研究の手法について、種々のパラメータの設定や刺激提示方法の詳細についてまとめた。*4 この成果には澤研究員と RA 栗原が執筆者として名を連ねており、本プロジェクトが教育的な効果ももたらしていることを裏付けている。

さらに、心理疫学やパッチクランプ法、オペラントチャンバーの使用法、フリーソフトウェアを使用したコンピ

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

ュータによる行動実験や統計解析法など、既存の研究手法についても批判的な再検討を行い、その成果を「心理学研究センター年報 第1号（平成24年3月刊行）」*5に「融合的心理学における測定」としてまとめた。

方法論の再検討を行い、初年度から書籍や査読付きの論文を出版できたことは、新たな方法の提案や既存の方法の改良が当初の計画通り達成できたことを示唆する。特に「伝えるための心理統計」*1の出版やシンポジウム「心理学における効果の大きさとばらつき」*2の開催を受け、国内の心理学関連諸学会から、岡田研究員と大久保研究員に講演やシンポジウム開催の依頼が相次いだ。これは本プロジェクトで提案された統計手法が心理学の幅広い領域に影響を与えたことを示しており、心理科学を融合するための方法論的基礎として重要な役割を果たすものと評価できる。この年の研究成果は Psychonomic Society *6, Cognitive Developmental Society *7, 視覚科学フォーラム *8 などの学会大会、研究会で各研究員により積極的に発表された。

ii. 心理的不適応に関する研究と検討

上述の方法論の検討を行うとともに、心理的不適応を検討するための基礎的知見を得るため、各センター研究員がそれぞれの役割に基づく研究を進めた。とりわけ、心理臨床に携わる研究員（乾・藤岡・村松・吉田・長田・高田・岡村 研究員）は、本学付属の心理教育相談室での指導員として、あるいはまた各々の臨床現場にて行う心理臨床を通して事例研究を進めた。具体的には、乾研究員は成人期の自閉スペクトラム症の精神分析的面接法、吉田研究員は染色体異常を原因とする知的能力障害を有する青年およびその青年の母親への発達臨床心理学的観点からのアプローチ、長田研究員は自閉スペクトラム症の青年期の解決志向型ブリーフセラピーによる二次障害への対応、岡村研究員は高次脳機能障害を有する者への臨床神経心理学的アプローチをそれぞれ事例研究として行った。

【平成24年度】

領域横断的な仮説モデルの生成を、心理疫学的調査に基づいて行った。また、初年度に行った方法論の検討を受け、ヒトならびに動物を対象とした基礎研究を行った。さらに、ヒトと動物を対象に行った研究を通じ、進化心理学的視点から行った理論を構築した。加えて、臨床心理学と基礎心理学の領域横断的融合を目指し、心理不適応の情報処理モデルを提案した。当初の計画は達成され、さらなる波及効果があった。

i. 心理疫学調査の実施

現代日本の臨床像の実態を把握するため、発達障がい、特に自閉症スペクトラムに焦点をあてた心理疫学的調査を行った。教育場面における実態を把握するため、全国から無作為抽出した2000の小学校の教諭に対し、発達障がいに関する知識・理解の度合いについて調査を行った。これは、Stone (1987) が行った自閉症についての研究で用いられた質問項目を現在の診断基準等に合わせて改訂したものである。この結果、300校、延べ数にして1600人を越える有効回答を得た。このような教育現場での発達障がいに関する大規模な調査は、これまでの心理学では数少ないため、データそのものに価値があると考えられる。本研究を通じ、小学校教諭の性別・教歴、自閉症スペクトラムを有する児童を教育した経験、属性、さらには地域といった複数の要因が、自閉症スペクトラムに関するリテラシーに深く影響しているという仮説モデルの生成に至った。これと並行して長田研究代表は、自閉症スペクトラム児の生涯発達に関する研究を行った。児童期に自閉症スペクトラムと診断された児が各ライフステージにどのような発達過程を遂げていくかを、須田ら（1996）が報告した自閉症児・者の実態調査をもとに、自閉症スペクトラム症が小児期に診断を受けてから成人期に至るまでの知的機能および適応機能のモデルを構築し、マルコフ連鎖モンテカルロ法を利用した Structural Equation Model のベイズ推定を用いて検証を行い、Child Psychiatry and Human Development に発表した *9。

ii. ヒト・動物を対象とした基礎研究

前年度に開発・改良した手法を用いて、ヒトならびに動物を対象とした基礎研究も行われ、そのうちのいくつかは国際的な欧文学術論文誌や国内の伝統ある査読付き論文誌に採択された。まず、本プロジェクトにおける重要な理論的柱である進化心理学の領域で長らく注目を集めてきた「裏切り者検知機構」について、表情の効果から検討した論文が Journal of Nonverbal Behavior に掲載された。*10

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

また、動物を対象とした研究も数多く行った。動物の研究はヒトと動物の間の心の連続性を進化の視点から考える上で重要である。その成果の一つとして、スunksというトガリネズミ目の動物を用いた条件性風味選好の研究がある。***11** この論文では、連合学習というメカニズムが種を越えて存在するものの、その強さは種のこれまでおかれてきた環境や、それに伴う進化の過程を反映し変化することが示された。このほか、ハトを対象とした空間学習の研究も行われた。この実験から、ヒトの条件づけ事態で確認されている情報統合プロセスがハトの空間学習においても援用可能であることが示された。***12** また、RA 栗原が澤研究員の指導のもと行った研究が、伝統ある邦文論文誌の一つである基礎心理学研究に採択された。***13** この論文では、古典的条件づけ事態で検討されてきた回顧的再評価について、条件性抑制という現象に着目し、道具的条件づけ事態から検討を行った。その結果、条件性抑制訓練に用いた興奮子を消去しても、道具的条件づけ事態では抑制属性に変化を与えないことが明らかになった。これらの結果を通して、ヒトやスunks、ハト、ラットといった系統の異なる種を比較するための材料が入手でき、比較認知的観点から、ヒトと動物における心の連続性を検討し、進化について考察することが可能になった。特に条件性風味選好などの古典的な条件づけ事態で、スunksやラットにおける違いを見いだすことができた。これにより、古典的条件づけのような極めて基礎的な過程においても種に共通する部分と環境に依存する部分があることが明らかになった。このような成果を統合させるかたちで結実したのが、第 4 回シンポジウム「Expansion of associative learning theory」***14** である。このシンポジウムでは学習心理学の記念碑的な業績であるレスコーラ・ワグナーモデルの提唱者で、国際的に著名なロバート・レスコーラ博士（ペンシルバニア大学名誉教授）を基調講演講師に迎えた。シンポジウムでは澤研究員によりスunksの研究などが紹介されたほか、機械学習の専門家や連合学習の専門家による刺激的な講演が行われるとともに、それに続いて真摯で積極的な討論が行われた。

動物を用いた神経生理学的研究については、視覚情報処理過程を解明するために行動実験および電気生理実験が行われた。運動する格子縞の呈示に対するゼブラフィッシュの視運動反応から、運動残効が存在していることを発見し、その網膜細胞から細胞外記録法によりマルチニューロン記録を行い、運動残効に対応する神経活動が存在することを突き止めた。さらにこの発見について現象の神経基盤を詳細に解明するため、マルチパッチクランプ電気生理実験装置により運動残効を担うニューロンの形態と局所神経回路網の解析を開始した。これらの成果の一部は日本基礎心理学会フォーラムの招待講演において発表された。***15**

iii. 基礎と臨床の融合に関する検討

本プロジェクトにおける重要な柱の一つである基礎心理学と臨床心理学の融合についても、いくつかの成果をあげることができた。基礎と臨床の研究員が研究計画段階から参画し、臨床心理士の資格を有する RA 石川が、社交不安傾向者の視線情報処理過程を検討した研究がその代表例である。***16** この研究では、実験心理学でも用いられる視線判断課題により、社交不安傾向者が、他者の視線を自分に向けられていると誤って判断しがちであることが示された。社交不安を持つ者にとって、自己に向けられた他者の視線は恐怖の対象である。したがって、他者が自分の方を見ているという誤った認知は、不安を高める一つの要因となると考えられる。この論文では、臨床的なテーマについて、実験心理学の手法によって精緻な検討を行うことが出来た。臨床的な洞察に実証的な裏付けを与えることは、心理科学の融合における理想的なかたちの一つである。加えて、臨床と基礎の融合については第 3 回シンポジウム「不安、うつ、妄想に挑む心理学：臨床と基礎の融合を目指して」***17** でも取り上げた。このシンポジウムには、外部から 150 名を越える参加者が集まり、基礎と臨床の融合がまさに求められていることを示す象徴的な出来事であったといえる。このシンポジウムではセンターの研究成果を公表するとともに、長田研究代表が指定討論を行うことで臨床現場の視点から基礎研究について問い直し、有機的な討論を行うことができた。

iv. 心理的不適応に関する研究

各研究員は心理的不適応を検討するための基礎的知見を得るためそれぞれ研究を行った。それらの成果は、International Neuropsychological Society ***18** や動物心理学会大会 ***19**、基礎心理学会大会 ***20**、神経科学会 ***21** などの学会大会で積極的に発表された。さらに、本プロジェクトの研究員全員が準備委員として開催した第 76 回日本心理学会大会では、研究員が自分自身の研究テーマでシンポジウムを開催した。テーマは「動物実験研究の意義

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

と将来—基礎から応用、隣接領域まで—*22, 「東日本大震災における支援専門職者への心理支援」*23, 「健康行動促進をめざしたリスク認知とヘルスコミュニケーション」*24, 「日本の EAP の現状と今後の課題」*25, 「少年非行と発達障害」*26 など多岐にわたった。本大会はおよそ 1 万人が参加する大規模な大会となり、本プロジェクトの成果を日本全国の心理学者に公開する良い機会となった。さらに、日本教育心理学会第 54 回総会における講演に岡田研究員が登壇*27 するなど、本プロジェクトが初年度に提案した心理統計手法の波及効果が平成 24 年度にも見られた。これは、本プロジェクトの成果が与える影響力を示す好例であると考えられる。

【平成 25 年度】

i. 心理疫学的調査に基づく検討

平成 24 年度に行われた心理疫学的調査をもとにモデルを作成し、その概要を第 5 回シンポジウム「Development and current situations of Cognitive Behavioral Therapy for children and/or persons with disabilities. —障がい児・者への認知行動療法 基礎研究から応用実践へ その発展と今—」*28 で紹介した。このシンポジウムでは、認知行動療法を脳損傷患者に対して積極的に行っているオーストラリア脳損傷協会シナプスの CEO である Jennifer Cullen 女史が基調講演を行った。このほか、長田研究代表より、平成 24 年度に実施した疫学研究の結果と今後の展望が報告された。この疫学研究は、平成 24 年度に文部科学省が全国小中学校の教諭を対象におこなった調査で得られた「普通級の教諭が、普通級に在籍する児童の 6%強に何らかの問題行動を認めている」という報告と比較しながら、自閉スペクトラム症に焦点をあて、教育場面における実態を把握するため、全国から無作為抽出した 2000 校の小中学校に対し、発達障がいに関する知識・理解の度合いについて調査を行ったものである。本研究を通し、小学校教諭の性別・教歴、自閉スペクトラム症を有する児童を教育した経験や属性、さらには地域といった複数の要因が、児童メンタルヘルスの専門家ではない教諭の持つ、発達障がいに関するリテラシーに深く影響しているという仮説モデルの検討を行っているという報告であった。さらに、岡村研究員および国里研究員による心理教育相談室および学外の現場での認知行動療法に関する実践研究報告も行われた。

このほか、長田研究代表を中心として行った疫学研究の成果が、International Journal of Social Psychiatry に掲載された*29。この論文では、南米及びアジアの新興国において、発達障害児を持つ母親のメンタルヘルスについて検討がなされ、経済発展と母親へのサポートには関連があり、その結果として、新興国でも比較的経済が発展した国では障害児の母親にうつなどのメンタルヘルス上の問題が生じにくくなることが明らかにされた。また、全国の小中学校に対して行った第 2 回疫学調査では、全国の小中学校から 4088 件の回答が得られた。

ii. ヒト・動物を対象とした基礎研究

先年度に引き続き、ヒトならびに動物を対象とした基礎研究も行われ、国際的な欧文学術論文誌や国内の伝統ある査読付き論文誌に採択された。大久保研究員と RA 石川らは、平成 24 度に発表した裏切り者検知に果たす表情の役割に関する研究を進展させ、その神経機構を検討する論文を Brain and Cognition に発表した。*30 また、PD の関口は澤研究員の指導の下、ヒトと動物の空間推論に関する論文を執筆し、その論文は動物心理学研究に掲載された。*31

iii. 基礎と臨床の融合的研究

基礎と臨床に関する融合的研究も進んでおり、石金研究員と RA 長畑によって、摂食障害が注意機能に及ぼす影響に関する検討が事象関連電位を用いて行われた。この研究から、身体に関連する画像を観察するとき、摂食障害傾向にある人では、注意が捕捉され、それに関連する事象関連電位の振幅も大きくなることがわかった。本研究では、摂食障害について、行動面だけでなく事象関連電位という脳の電氣的な活動からも検討を進め、融合的な知見を得ることができたと言える。なお、この成果は Vision Science Society 2013 で発表された。*32

この研究にあるような「脳科学」という基礎的な側面と「心理臨床」という応用的な側面の融合について、最先端の知見を披露し、議論を行ったのが第 6 回シンポジウム「生理心理学のフロンティア」*33 である。石金研究員が本プロジェクトの成果を紹介するとともに、小林克典博士（日本医科大学・准教授）によって、脳内の海馬にお

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

ける薬理学プロセスに注目した抗うつ剤の神経基盤について講演が行われるなど、生理心理学という基礎分野の先端的な成果が、抗うつ剤の作用に関する新たな知見を臨床場面にフィードバックし、発展的につながることを示された。

iv. 心理統計に関する研究と成果

初年度に行った新たな心理統計法の提案について、日本基礎心理学会第1回フォーラムにおいて、岡田研究員が講演を行った。*34このフォーラムは、実験心理学で多く用いられる分散分析に焦点を当てたものである。フォーラムは大久保研究員が企画者として関わるだけでなく、心理科学研究センターが共催し、本プロジェクト全体が積極的に関わるかたちで行われた。このフォーラムで示したような心理統計に関する成果は、大久保研究員と岡田研究員が論文としてまとめ、それぞれ基礎心理学研究に掲載された。大久保研究員は帰無仮説検定に偏った心理統計の現状の問題点を指摘 *35し、岡田研究員は帰無仮説検定ではなく情報仮説の評価をベイズ統計の枠組みで行うことで、帰無仮説検定の使用にまつわる種々の問題を解消できることを述べた。*36

このような心理統計に関する研究成果については、このほかにも大久保研究員が日本認知心理学会第11回大会の認知心理学ベーシックセミナーにおいて、効果量・信頼区間・事前比較検定について講演 *37したり、日本パーソナリティ学会第22回大会における広報委員会企画シンポジウムにおいて話題提供を担当 *38するなど、平成25年度も引き続き多数の学会関係者からの講演依頼を引き受けた。また、日本社会心理学会 春の方法論セミナーにおいては、大久保研究員と岡田研究員の両名が講演を行った。このセミナーは、社会心理学で問題になっているデータ捏造や再現性の低さについて、方法論の観点から問題点を指摘し、今後の研究活動に役立ててもらうために企画された。大久保研究員は検定力の観点から再現性を高める手続きのあり方について述べ *39、一方、岡田研究員は既存の統計手法における再現性に関わる問題点を指摘し、それを解決するための提案としてベイズ統計学を用いた手法を紹介した。*40これらの講演はオンラインで同時配信されるとともに、現在はアーカイブ化されたものが社会心理学会のウェブサイトで開催されている。このように数多くの学会から講演の依頼を受けたことは、本プロジェクトの成果である新たな統計手法の提案が、心理学のさまざまな領域で必要とされることを強く示している。このような心理学諸領域に関わる方法論の開発は、本プロジェクトの目的である「融会的心理科学の創成」に重大な貢献となると言える。なお、この一連の統計手法について、岡田研究員は効果量に着目した研究を行い Behaviormetrika に論文を発表した。*41

【平成26年度】

平成26年度はこれまで継続してきた研究成果をまとめるとともに、実証的方法に基づいたモデルの評価を行い、心理的不適応の心的モデルについては可能な限り実践的評価も併せて行った。さらにモデルの修正や進化的適応環境などの観点からの検討を行った。

i. 疫学調査の分析

平成25年度に行った疫学調査による回答を元に、発達障害に関わる素因について検討を進めた。調査結果内における重要な知見として「冷淡で無感情の特性(CU特性)」を持つ児童が、18.8%に及ぶことが確認された。この特性は注意欠如・多動症との関連があるとされる素行症の中でも重症度が重いものの特徴であることから、我が国の小中学校指導の中でCU特性を持つ児童へ慎重な対応を行うことが、少年犯罪の予防の一助となる可能性が考えられる。

また、3回目の疫学調査として、東京都・神奈川県下の小中学校1000校を対象とした特別支援教育制度の実態調査を行った。各小中学校に特別支援教育コーディネーターを置くことが義務付けられてから10年になるが、実際に特別支援教育制度が機能しているかどうかは未だに手さぐりである学校も少なくない。また、特別支援教育コーディネーターも各学校における役割が必ずしも明確にはなっていない。本研究は、柘植(2008)が、特別支援教育制度のレベルを把握する尺度としてパイロット研究の中で開発した「学校やその地域(学校区)における特別支援教育の構築のための学校アセスメントシステム(ASCoSoWa)」を用いて、小中学校における特別支援教育制度を

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

階層的に評価できるか、あるいは各学校における特別支援教育制度の特徴をモデルとして示せるかどうかを明らかにするために疫学的手法を用いてデータを収集した。

ii. 基礎と臨床の融合に関する検討

モデルの実証的な評価を行う過程で基礎と臨床の融合も進んだ。まず、不安障害や抑うつなどの精神疾患の危険因子として扱われる対人依存傾向を取り上げ、それが視線の情報処理に与える影響について検討を行った。この研究は臨床心理士として本学心理教育相談室でも活動する RA 石川、人格心理学・臨床心理学を専門とする高田研究員、そして実験系の基礎心理学を専門とする澤研究員と大久保研究員が共同で行った。視線の認識について検討したところ、対人依存の高い人達は視線判断の成績が高く、しかも笑顔の時に正確に判断できることがわかった。これは対人依存の高い者は他者のポジティブな評価に対して敏感であることを示し、それが不安や抑うつなどの精神疾患に関わる可能性が示唆された。基礎と臨床の融合を目指した本研究は心理学研究に論文として採択された。***42**

また、石金研究員と RA 長畑は、平成 25 年度に事象関連電位を測定して行った摂食障害に関する研究について、脳血流量を測定するパラダイムを用いて更に検討を進め、摂食障害の傾向と頭頂葉・後頭葉の領域における脳活動が相関することを示した。***43**

iii. 動物と人間の連続性に関する検討

澤研究員と RA 栗原は研究成果を雑誌論文として *Frontiers in psychology* に発表した。***44** この研究では、澤研究員の研究課題でもあるベイジアンネットワークに基づいた因果推論に関して、ラットも人間と同様の推論様行動を示すかという問題を扱ったものである。結果として、事象間に因果関係の存在を推定するために必要な時間的前後関係の情報を、人間と同様にラットも使用していることが明らかとなった。本研究は、動物と人間の連続性という本プロジェクトのテーマについて、推論という高次の過程について重要な証拠を提示するものとなった。

加えて、動物と人間の連続性に関して、電気生理学的なアプローチを用いた研究も行われた。マルチパッチクランプ電気生理実験装置を中心に用いた研究では、視覚初期過程のニューロン活動の特性分析と局所神経回路網の解析を行った。さらに解析により明らかになったニューロン活動の特性と行動実験の結果を対応させることで、機能的意義を実証する研究を行った。単純なモデル生物としてカエルを被験体とした研究では、黒いスポットの拡大刺激を呈示し、拡大運動を符号化するニューロンの種類や、刺激の連続性がニューロン集団による協調的活動で符号化されることを発見した。さらにそれらの活動が視覚誘発性の逃避行動を引き起こしていることを解明した。黒いスポットの拡大刺激は下等な脊椎動物からヒトにいたるまで一貫して同様の逃避や回避行動を誘発するため、今回解明された知見は脊椎動物の視覚系において情報符号化の一般的な原理となることが期待される。これらの成果の一部は、日本神経科学会 ***45** と北米神経科学会 (SfN) ***46** において発表され、論文としても投稿準備中である。

また、マウスを用い、視運動反応を指標として、視覚における運動情報処理と運動残効の神経基盤に関する研究を行った結果、視運動反応の基本的な特性が明らかとなり、運動残効様の行動が存在していることを発見した。さらに、視運動反応と運動残効様の行動が運動方向選択性のニューロン群により制御されていることが示唆された。これらの成果の一部は論文として日本神経回路学会第 25 回全国大会講演論文集に受理された。***47** 局所神経回路網については、マウス網膜標本を用い、顕微鏡で観察するだけで細胞の形態から機能を推定する手法の構築に成功した。この手法は生理実験時において、通常顕微鏡で観察しただけでは予め知ることのできない細胞のサブタイプが同定可能となり、複雑で多岐にわたる細胞種を含む局所神経回路網を機能的に解析する上で非常に強力なツールとなる。この成果は現在投稿準備中である。

iv. 新たな方法論・心理統計に関する検討

初年度から行っている方法論的検討に関する成果が論文としていくつか出版された。大久保研究員が中心となり、ワーキングメモリの基礎的な測定方法について日本人用に改定を加えた日本語版オペレーションズパンテストを開発し、その結果を心理学研究に掲載した。***48** なお、このテストは、タブレットで動作するプログラムをすでに本プロジェクトのホームページ上で公開しており、日本国内だけでなく中国やインドなど各国から多数のダウンロードがなされている。また、臨床場面や脳画像計測などで必ず測定される利き手の計測についても、これまでの

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

利き手テストの問題点を解決した **FLANDERS** 利き手テストの日本語化を大久保研究員が行い、その成果は心理学研究に掲載された。***49** 利き手は脳の構造や機能の個人差と相関することが知られており、臨床、基礎、発達など分野を問わず測定が必要なものである。したがって、広い分野、そして場面で日本語版 **FLANDERS** 利き手テストが使用されることを期待できる。また、我々が提案した新たな心理統計のあり方について、岡田研究員が依頼を受け、日本発達心理学会第 26 回大会において、効果量の研究場面における使用について講演を行った。***50**

v. シンポジウムの開催

これまでもさまざまな学会から講演を依頼されるなど高く評価されてきた心理統計に関する成果を広く公開するため、シンポジウム「**Big data in Psychological Science and related disciplines**」***51**を開催した。シンポジウムでは我々の研究成果を紹介するとともに、国内外の研究者に参加を依頼し最先端の知見を元に議論を行った。あわせて、本プロジェクトからはベイズ統計学に基づき、学習心理学、臨床心理学に応用した知見について、PD 高橋と澤研究員が報告を行った。また、岡田研究員はベイズ統計学における情報仮説の評価を中心とした講演を行った。

さらに、本プロジェクトにおける進化心理学的な検討について、シンポジウム「**Face and communication: Cognitive basis and its evolution**」***52**で大久保研究員がその成果を報告した。この報告はこれまでに発表した裏切り者の検出に関する論文 ***10**、***30** およびそこからの進捗をまとめたものであった。また、顔の認識に関する進化的な検討で国際的に著名な Mark Changizi 博士 (2Ai Labs)、魅力の研究を数多く行ってきた Bruno Laeng 博士 (オスロ大学教授) らを迎え、進化心理学的な視点から活発な意見交換を行った。

【平成 27 年度】

最終年度を迎え融合的心理科学の創成に向けて、取りまとめを行った。

i. 心理疫学調査による成果

これまでに 3 回行った心理疫学の大規模調査を、長田研究代表が 2 つの雑誌論文としてまとめ、それぞれ **Social Science & Medicine Population Health *53** と **Journal of the American Academy of Psychiatry and the Law *54** に採択された。大規模疫学調査によって得られたデータに基づき、発達障がいに対する理解について、また、非行予防に関連する CU 特性の実態について、さらにわが国の小中学校における特別支援教育制度の実態について正確な情報が得られた。これらのデータをもとに、臨床応用への可能性や教育場面での留意点について提案を行った。具体的には、わが国の小中学校の通常級に在籍する児童の中には、6%強の神経発達症を有する児が存在し、その 80%強が教諭によって自閉スペクトラム症であると思われることが分かった。わが国の小中学校の通常級の教諭は、メンタルヘルスの専門家ではないが、児童メンタルヘルスが必ずしも十分ではないパキスタンの専門家 (医師、心理士およびその他の専門家) の自閉スペクトラム症についてのリテラシーには大きな差がないことが示されたことから、通常級に在籍する自閉スペクトラム症を有する児童には気づけていること、ただし、その対応には教諭間で差があることが明らかになった。知識としての自閉スペクトラム症とその対応には乖離があり、真の意味でリテラシーは不足しており、今後わが国の国民レベルでの自閉スペクトラム症リテラシーの向上が必要であり、そのための提案を行った。これに関連して、3 カ年目に特別支援教育制度の実態把握疫学調査を行ったが、特別支援教育コーディネーターの役割を明確にすることは教諭の自閉スペクトラム症リテラシー向上への一助となると考える。

ii. ベイズ統計学に関する検討

岡田研究員がこれまでの成果をまとめ、帰無仮説検定に変わるアプローチであるベイズ推定に基づく情報仮説の評価方法について **Research Synthesis Methods** に論文を投稿し、採択された。***55** また、岡田研究員はこれまで検討を進めてきたベイズ・アプローチによる多次元尺度法や個人差の検討方法、そして、実験研究に用いるベイズ・モデリングについてまとめたものを国際学会において発表した。***56**

岡田研究員を中心にこれまで培ってきたベイズ統計学に基づくデータ解析手法を適用し、基礎と臨床の融合を目指す研究も進んでいる。そのひとつとして抑うつが将来予測に与える影響について検討がある。***57** これは臨床心理学を研究する国里研究員と実験心理学を研究する大久保研究員が共同で関わったものである。このようにベイズ

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

統計学に基づく方法論を、臨床心理学の領域にも適用し、統合的な心理科学の成果として公表できるようになった。なお、国里研究員を中心とするグループでは、基礎的な方法による臨床的なテーマの研究が進められており、筋電位・皮膚電位測定装置を用いて、不安や恐怖症に関する検討が進められた。

iii. シンポジウムの開催

これまでの総括として、「統合的心理科学の創成：心の連続性を探る」*58 と題して集大成のシンポジウムを開催した。専門の違う 5 名の研究員がプロジェクトにおける研究成果について口頭発表を行ったほか、PD・RA も各研究員指導の下に進めてきた研究成果をポスター形式で発表した。さらに、長谷川寿一客員研究員を迎え、「統合的心理科学の創成は成し得たか？」と題したパネルディスカッションを行った。このセッションでは 5 年間の研究活動を振り返りつつ、ベイズ理論を軸にした今後のさらなる発展についても活発なディスカッションが行われた。学内外から多くの参加者が集まり、広く研究成果の発信と社会還元ができたものとする。

iv. 総括

われわれのプロジェクトでは、心理疫学の観点から大規模データを取得することで実態を把握し、そのデータを効果量、信頼区間を重視し検討するとともに、ベイズ統計を柱としたあらたな視点から再検討を行った。そして、その解析結果に基づき、応用的な提案を行った。例えば、疫学研究での曝露要因と結果の因果的作用を評価する際に用いられる様々な指標（リスク差、オッズ比、率比など）については、ベイズ推定が可能である。ただし、疫学研究には記述疫学と分析疫学の二つがあり、研究目的に応じて研究方法を使い分ける必要がある。上記のリスク比、オッズ比という指標を用いる場合、因果関係の推論を行っているので分析疫学となり、上記のようにベイズ推定を用いることができる。一方で「わが国において自閉スペクトラム症を有する者は何人いるか？」を明らかにする場合は記述疫学であるから、頻度論を用いることになり、ベイズ統計学は使えない。つまり、疫学はもとより、心理学においても研究目的に対して、適切な研究方法を選択していなければ、研究目的となる問題に明確に答えることはできないので、すべての心理学をベイズ理論で融合させることは難しいこととなる。以上のように、限界、課題を理解しつつ、心理学の諸領域を融合するための一連の流れが成果として結実したと言える。

<優れた成果が上がった点>

心理統計の新しいあり方の提案として出版した「伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力」*1 は多くの関係者の注目を集め、その内容について、さまざまな学会から講演やシンポジウムの依頼を受けた。スケジュールの都合がつかず依頼に応ずることができなかったケースがあり、それが許せばさらに多くの学会に招かれていたであろう。このように多くの招待を受けたことは、われわれの成果が日本のあらゆる心理学関係者にとって有用かつ興味をいだかせるものであったことを示すものである。この考えを支持するように、本書は日本行動計量学会から第 3 回杉山明子賞（出版賞）を授与された。

方法論は心理学諸領域を融合するための基礎となるものである。その基礎固めに関する成果について、さまざまな学会から講演を依頼されたことはこの研究成果が心理学諸領域を融合する基礎づくりにおいて重要な貢献であったことを裏付ける。実際、本プロジェクトの成果に基づき講演を依頼された学会は、基礎研究を行う研究者が集う日本基礎心理学会や日本認知心理学会、比較的応用的な研究者が集う日本教育心理学会や日本パーソナリティ心理学会、そして、基礎と応用の双方の領域の研究者が集う日本社会心理学会と日本発達心理学会と多岐にわたり、心理学諸領域を横断するものであった。

また、日本全国を対象として行った心理疫学の大規模調査はこれまでに例がなく、データそのものが貴重である。第 1 回調査では全国 2000 の小学校に対し、発達障がいに関する知識・理解の度合いについて調査を行ったほか、第 2 回調査では発達障がいに関わる素因について検討を進め、「冷淡で無感情の特性(CU 特性)」を持つ児童が 18.8% に及ぶことが確認された。この特性は ADHD との関連があるとされる素行症の中でも重症度が重いものの特徴であり、このような予測因子の分布をデータから明らかにできた意義は、今後の指導を考える上で大きい。なお、この成果については長田研究代表が論文を国際論文誌に投稿し、採択されている。*53, *54 今後、小中学校の通常級

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

における特別支援教育のあり方、および少年非行の予防といった場面で、広く影響を与えることが期待される。

<課題となった点>

本プロジェクトの成果を広く公開するためにシンポジウムを開催し、その活動報告として、講演内容を掲載した年報を作成し専修大学学術機関リポジトリ (SI-Box) において web 上で公開してきた。しかしながら、文字情報のみでは一般の方々には手に取りにくく、一般公開としては不十分であった。そこで最終年度には、さらに幅広い方々に対し情報を公開するため、ホームページを改修し web 上でシンポジウム動画の公開も行った。これによりシンポジウムに参加できなかった方にも当日の内容をそのまま伝えることができるようになった。さらに、一方的な公開では訴求力に乏しいことから、フェイスブックやツイッターといったソーシャル・ネットワーク・サービスを用いてさまざまな方々と交流をしながら、インターアクティブな情報発信に努めた。

<自己評価の実施結果と対応状況>

専修大学では、学内の教育研究組織それぞれに機関別自己点検・評価実施委員会をしており、本プロジェクトを統括する社会知性開発研究センターも同様である。プロジェクトの取組みや進捗状況については、定期的に自己点検・評価委員会に報告され、その内容は学長を議長とする社会知性開発研究センター運営委員会でも報告される。また、これらの報告の適切性は、全学の自己点検・評価運営委員会および自己点検評価委員会が精査し、最終的に学部長会および大学院委員会に報告される。また、予算措置および執行状況についても定期的に運営委員会で報告され、運営委員から、予算運用の適切性について厳しく精査される体制となっていた。

本プロジェクトでは、シンポジウムでの成果公表について専門外の聴講者には難解な内容が多いとの指摘を受け、講演時に補助スライドの投影を行うよう改めた。

<外部（第三者）評価の実施結果と対応状況>

本プロジェクトの研究成果の達成状況・達成度を外部の視点から客観的に評価するため、学外研究者 3 名（鮫島 和行 玉川大学准教授、牛谷智一 千葉大学准教授、小関俊祐 桜美林大学講師）からなる第三者評価委員会を設置してきた。平成 28 年 3 月に行った同委員会では、いずれの委員からも三段階（A～C）中で最高である A 評価を頂いたほか、「各年度に非常に活発に論文発表・学会発表がなされており、PD/RA の発表が積極的である」（鮫島委員）、「シンポジウムへの参加者が多数であり、一般社会への還元がしっかりとされている点において、きわめて優れている」（牛谷委員）、「研究基盤が構成されたことによって、今後も継続的な研究の遂行と発信が期待できる」（小関委員）、等の所見をいただいた。

<研究期間終了後の展望>

本プロジェクトの成果をふまえ、平成 28 年 4 月より新たなプロジェクトを立ち上げた。心理学分野に止まらず、心理や行動の特性を検討する心理学領域と現実の消費社会における経済活動を検討するマーケティング・サイエンス領域との有機的な学際的融合を目指す。心理学、マーケティング・サイエンスとも、ヒトの判断や行動をデータ化して用いる実証的な分野である。そこで我々は、データの解析手法に焦点を当て方法論を構築し、心理メカニズムならびに消費社会・消費者行動の理解を目指す。

<研究成果の副次的効果>

本プロジェクトで提案した心理統計の新しいあり方は、すでに多くの心理学領域の研究者に影響を与えた。その結果として、2015 年の 6 月に改定された日本心理学会の投稿・執筆の手引きにおいて、「伝えるための心理統計」*1 などの書籍を通して我々が提案した方法が採用された。すなわち、論文の結果の報告において、効果量や信頼区間を付記することが明示的に求められるようになった。日本心理学会の投稿・執筆の手引きは日本の心理学関連論文誌のほとんどで採用される書式を定めたものである。このような心理学諸領域に共通する問題について、直接的な影響を与えられたことは重大な成果であると考えている。

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| (1) <u>心理科学</u> | (2) <u>ベイズ統計学</u> | (3) <u>進化心理学</u> |
| (4) <u>心理疫学</u> | (5) <u>実験心理学</u> | (6) <u>臨床心理学</u> |
| (7) <u>融合</u> | (8) _____ | |

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

◎日本語論文：著者名(刊行年)．タイトル 掲載誌名，巻(号)，該当ページ。

◎英語論文：著者名(刊行年)．タイトル 掲載誌名，巻(号)，該当ページ。

◎通し番号と著者名間の「*番号」は，11(4)に対応する研究成果を示す。

◎最後尾の [✓] マークは査読有り論文を示す。

1. Osada, H., Okamura, Y., & Muramatsu, T. (2011). A review study of juvenile antisocial behaviors related to intellectual and developmental disabilities (including forensic and/or criminal issues). 専修大学人文科学年報, 41, 61-71.
2. 長田洋和・正治幸恵 (2011). 高機能自閉症および定型発達児の鑑別尺度としての遊びの質問票 (Japanese version of Children's layfulness Scale: JCPS) の有用性に関する予備的研究 専修人間科学論集心理学篇, 1, 47-51.
3. Laeng, B., Okubo, M., Saneyoshi, A., & Michimata, C. (2011). Processing spatial relations with different apertures of attention. *Cognitive Science*, 35, 279-329. [✓]
4. Okubo, M. & Ishikawa, K. (2011). Automatic semantic association between emotional valence and brightness in the right hemisphere. *Cognition and Emotion*, 25, 1273-1280. [✓]
5. 大久保街亜 (2011). 反応時間分析における外れ値の処理 専修人間科学論集心理学篇, 1, 81-90. [✓]
6. Ishii, Y., Okubo, M., Nicholls, M. E. R., & Imai, H. (2011). Lateral biases and reading direction: A dissociation between aesthetic preference and line bisection. *Brain and Cognition*, 5, 242-247. [✓]
7. Michimata, C., Saneyoshi, A., Okubo, M., & Laeng, B. (2011). Effects of the global and local attention on the processing of categorical and coordinate spatial relations. *Brain and Cognition*, 77, 292-297. [✓]
8. 室田尚哉・宮田久嗣・澤 幸祐 (2011). ラットがレバーを押し続ける行動にニコチンが及ぼす影響と衝動性について 専修人間科学論集心理学篇, 1, 71-79. [✓]
9. 乾 吉佑 (2011). 心理臨床の基礎としての精神分析 臨床心理学, 11(6), 787-792. [✓]
10. 乾 吉佑 (2011). 細貝由紀子論文「コントロールしないと不安なクライアントとの面接過程」に対する事例コメント 上智大学臨床心理学研究, 34, 201-212.
11. Joel, S., MacDonald, G., & Shimotomai, A. (2011). Conflict pressures on romantic relationship commitment for anxiously attached individuals. *Journal of Personality*, 79(1), 51-74. [✓]
12. 小澤拓大・下斗米淳 (2011). 他者のための自己犠牲の効果とその規定因の検討 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 235.
13. 小澤拓大・瀧澤 純・山下利之・下斗米淳 (2011). 他者の心の推測における固有情報使用の抑制要因の検討 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 93.
14. 風間文明・下斗米淳・飛田 操・角尾美奈 (2011). 世間に対する自己機能 (4) : 世間への適応反応の検討 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 140.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

15. 風間文明・下斗米淳・飛田 操・角尾美奈 (2011). 自己制御規範と世間イメージ 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 208.
16. 山岡重行・清水 裕・下斗米淳 (2011). 自己制御規範顕現性の個人差と世間を意識する状況 日本感情心理学会第 19 回大会・日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会発表論文集, 34.
17. 村松 励 (2011). 家庭裁判所における非行臨床の歴史を振り返って 犯罪心理学研究 50 周年記念特別号, 56-71. [✓]
18. 村松 励 (2011). 少年非行, 触法行為 小児内科, 43(5), 900-903.
19. 村松 励 (2011). 最近の非行少年 月刊 BAN 2011 年 7 月号, 20-24.
20. 榎本玲子・山上精次 (2011). 道具使用による手周辺における空間知覚の変容に関する研究 基礎心理学研究, 29(2), 191.
21. 山上 望・榎本玲子・山上精次 (2011). 悪意と攻撃行動 ―反応時間を手がかりとした実験的検討の試み― 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 670.
22. 高田詩織・榎本玲子・山上精次 (2011). 凶式顔における怒り優位効果についての検討 ―顔構成パーツのカウント課題を用いて― 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 709.
23. 吉田弘道 (2011). 子育て支援者の教育と研究 ―現状と課題 子育て支援と心理臨床, 3, 56-61.
24. 吉田弘道 (2011). 親のメンタルヘルス: 愛着形成への援助 子育て支援と心理臨床, 3, 104-107.
25. 岡村陽子 (2011). ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争がメンタルヘルスに与えた影響 専修大学人文科学研究所月報, 252, 5-18.
26. 岡村陽子 (2011). 高次脳機能障害者の SST におけるビデオ視聴効果 ―効果の検証方法に関する予備的検討― 専修人間科学論集心理学篇, 1, 53-60. [✓]
27. Kato, J. & Okada, K. (2011). Simplification and shift in cognition of political difference: Applying the geometric modeling to the analysis of semantic similarity judgment. *PLoS One*, 6, e20693. [✓]
28. 岡田謙介 (2011). クロンバックの α に代わる信頼性の推定法について 日本テスト学会誌, 7, 37-50. [✓]
29. *3 Okada, K. & Mayekawa, S. (2011). Bayesian nonmetric successive categories multidimensional scaling. *Behaviormetrika*, 38, 17-31. [✓]
30. 岡田謙介 (2011). クロンバックの α 係数とは何だったのか: 信頼性係数のレビューと実データ分析 専修人間科学論集心理学篇, 1, 91-98.
31. 岡田謙介・繁樹算男 (2011). 小標本における選抜効果を補正する相関係数の推定について 独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構報告書, 4, 67-84.
32. 中村敏健・平石 界・小田 亮・齋藤慈子・坂口菊恵・五百部裕・清成透子・武田美亜・長谷川寿一 (2011). マキヤベリアニズム尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 20(3), 233-235. [✓]
33. Akechi, H., Senju, A., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2011). Do children with ASD use referential gaze to learn the name of an object? An eye-tracking study. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 5, 1230-1242. [✓]
34. Hirata, S., Matsuda, G., Ueno, A., Fuwa, K., Sugama, K., Kusunoki, K., Fukushima, H., Hiraki, K., Tomonaga, M., & Hasegawa, T. (2011). Event-related potentials in response to subjects' own names: A comparison between humans and a chimpanzee. *Communicative & Integrative Biology*, 4, 321-323. [✓]

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

35. Ikeda, K. & Hasegawa, T. (2011). Task confusion after switching revealed by reductions of error-related ERP components. *Psychophysiology*, doi:10.1111/j. 1469-8986. 01295.x. [✓]
36. Kikuchi, Y., Senju, A., Akechi, H., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2011). Atypical disengagement from faces and its modulation by the control of eye fixation in children with autism spectrum disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 41, 629-645. [✓]
37. Senju, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2011). Atypical modulation of face-elicited saccades in autism spectrum disorder in a double-step saccade paradigm. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 5, 1264-1269. [✓]
38. 長谷川寿一 (2011). 行動生物学のカッティングエッジ 学術の動向, 16(4), 57.
39. 長谷川寿一 (2011). 人間行動進化学の動向 学術の動向, 16(4), 81-82.
40. 高田夏子 (2011). The Art Therapy for the Dissociative Identity Disorder - comparing the expression of picture, sand play and clay- 箱庭療法学研究, 24(2), 101-113.
41. 長田洋和 (2012). 発達障害のスクリーニング 子育て支援と心理臨床, 5, 121-125. [✓]
42. *9 Osada, H., Tachimori, H., Koyama, T., & Kurita, H. (2012). Longitudinal developmental courses in Japanese children with autism spectrum disorder. *Child Psychiatry and Human Development*, 43, 895-908. [✓]
43. 長田洋和・藤川洋子・小栗正幸・榎屋二郎・村松 励 (2012). 少年非行と発達障害 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, S(10).
44. *10 Okubo, M., Kobayashi, A., & Ishikawa, K. [RA] (2012). A fake smile thwarts cheater detection. *Journal of Nonverbal Behavior*, 36, 217-225. [✓]
45. *16 石川健太 [RA]・岡村陽子・大久保街亜 (2012). 社会不安傾向者の視線方向判断：表情と解釈バイアス 心理学研究, 83(3), 225-231. [✓]
46. 大久保街亜 (2012). ジェスチャーから言葉が生まれた：言語のジェスチャー起源説 日本語学, 33, 16-26.
47. 小林晃洋・大久保街亜 (2012). 日本人参加者における作業記憶測定 専修人間科学論集心理学篇, 2, 27-34. [✓]
48. 小林晃洋・大久保街亜 (2012). Ubuntu, Octave, Psychtoolbox によるフリーウェア実験環境構築 専修大学社会知性開発研究センター／心理科学研究センター年報, 1, 89-108.
49. *13 栗原 彬 [RA]・澤 幸祐 (2012). 道具的条件づけにおける条件性制止訓練と興奮子消去の効果 基礎心理学研究, 31, 35-41. [✓]
50. *11 Sawa, K. & Ishii, K. (2012). Conditioned flavor preference and the US postexposure effect in the house musk shrew (*Suncus murinus*). *Frontiers in Psychology*, 3, doi: 10. 3389/fpsyg. 2012. 00242. [✓]
51. Fujiwara, H., Sawa, K., Takahashi, M., Lauwereyns, J., Tsukada, M., & Aihara, T. (2012). Context and the renewal of conditioned taste aversion: The role of rat dorsal hippocampus examined by electrolytic lesion. *Cognitive Neurodynamics*, 6, 399-407. [✓]
52. 澤 幸祐 (2012). 連合学習理論は擬鼠主義の産物か ―表現論としての連合理論― 動物心理学研究, 62, 59-67. [✓]
53. *12 Leising, K. J., Sawa, K., & Blaisdell, A. P. (2012). Factors that influence negative summation in a spatial-search task with pigeons. *Behavioral Processes*, 90, 357-363. [✓]
54. 栗原 彬 [RA]・山上精次・澤 幸祐 (2012). 反応時間課題における主観的予期と行動の乖離：延滞条件づけと痕跡条件づけを用いた検討 基礎心理学研究, 30(2), 203-204. [✓]

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

55. 乾 吉佑 (2012). 田嶋誠一著「児童福祉施設における暴力問題の理解と対応」に対する書評 臨床心理学, 12(2), 296-297.
56. MacDonald, G., Marshall, T. C., Gere, J., Shimotomai, A., & July, L. (2012). Valuing romantic relationships: The role of family approval across cultures. *Cross Cultural Research*, 46, 366-393. [✓]
57. 下斗米淳・小澤拓大 (2012). 対人関係における交換原理の指標化の探索的検討：指標の比較分析を通して 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 70.
58. 小澤拓大・下斗米淳 (2012). 自己犠牲の適応の検討 (1)：動機・内容・相互依存の観点から 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 148.
59. 小澤拓大・下斗米淳 (2012). 結果関連関与が意思決定におけるネガティビティ・バイアスの強度に及ぼす影響 — 将来自己と心理的安全装置の関連 — 専修人間科学論集心理学篇, 2, 9-20.
60. 藤岡新治 (2012). 村田航論文「短期で面接が中断した中学生 3 年生男子ケース」へのコメント 専修大学心理教育相談室年報, 18, 127.
61. 榎本玲子・山上精次 (2012). 身体近傍空間知覚における道具使用の影響に関する検討 基礎心理学研究, 30(2), 213.
62. 榎本玲子・山上精次 (2012). 身体性を有した道具の使用による身体表象の変容に関する研究 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 530.
63. 山下花緒・榎本玲子・山上精次 (2012). 両耳分離聴による色聴共感覚の検討 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 618.
64. 山上精次・高砂美樹・サトウタツヤ・鷺見成正・溝口 元 (2012). シンポジウム：1912 年とこの 100 年の心理学の展開 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 979.
65. 山上精次 (2012). 心理学研究室の近現代史と 2012 年日本心理学会大会 *Annals of Yamagami Laboratory*, 2, 1-2.
66. 吉田弘道 (2012). 育児不安研究の現状と課題 専修人間科学論集心理学篇, 2, 1-8.
67. 吉田弘道 (2012). 乳幼児健診と子育て支援 — 総論 乳幼児健診 子育て支援と心理臨床, 5, 6-8.
68. 吉田弘道 (2012). 乳幼児健診と子育て支援 — 臨床心理士の立場から 子育て支援と心理臨床, 5, 44-49.
69. 石金浩史 (2012). ニューロンによる情報表現の実証的研究について 専修人間科学論集心理学篇, 2, 21-25. [✓]
70. 原澤賢充・南部政智・北崎充晃・石金浩史 (2012). 差動皮質応答による空間的注意位置関連領野の同定：fNIRS による研究 信学技報, 112, 55-57. [✓]
71. 岡村陽子 (2012). 海外文献紹介 Neuropsychological Rehabilitation: Theory, Models, Therapy and Outcome. 臨床心理学, 12(2), 291-293.
72. 岡村陽子 (2012). セルフアウェアネスと心理的ストレス 高次脳機能研究, 32(3), 438-445.
73. 中沢 仁 (2012). ブレイン・デコーディングとブレイン・マシン・インターフェースを用いた心理学的研究についての論考 専修人間科学論集心理学篇, 2, 35-42.
74. Okada, K. (2012). A Bayesian approach to asymmetric multidimensional scaling. *Behaviormetrika*, 39, 1-14. [✓]
75. 岡田謙介 (2012). 因子数が明らかでない場合の信頼性のベイズ推定 独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構報告書, 7, 71-79.
76. Nozaki, M., Fujisawa, K. K., Ando, J., & Hasegawa, T. (2012). The Effects of Sibling Relationships on Social Adjustment

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

- among Japanese Twins Compared with Singletons. *Twin Research and Human Genetics*, 15(6), 727-736. [✓]
77. 高田夏子 (2012). Goya の黒い絵と臨床における絵画・夢・イメージ 専修大学人間科学論集心理学篇, 2, 43-59.
78. 高田夏子 (2012). 箱庭とことば 箱庭療法学研究, 25(1), 巻頭言.
79. 乾 吉佑 (2012). カナータイプの自閉症との 40 年間の精神分析的な心理療法から学んだこと 専修大学人間科学論集心理学篇, 3, 11-22.
80. 乾 吉佑 (2012). 心の全体像を見渡すことのむずかしさ 精神分析研究, 56(1), 79-81.
81. 乾 吉佑・西村寛子・川戸 圓・桑原和子 (2012). シンポジウム討論資料「精神分析と箱庭」 箱庭療法研究, 25(1), 111-136.
82. *30 Okubo, M., Ishikawa, K. [RA], & Kobayashi, A. (2013). No trust on the left side: Hemifacial asymmetries for trustworthiness and emotional expressions. *Brain and Cognition*, 82(2), 181-186. [✓]
83. Okubo, M. & Jiang, Y. (2013). Grotesque impressions enhance the gaze cueing effect. *International Journal of Social Science Studies*, 1(1), 215-221. [✓]
84. 大久保街亜 (2013). 視線・不安・恐怖：視線手がかり法による検討 専修大学人文科学年報, 43, 79-96.
85. *31 関口勝夫 [PD]・牛谷智一・澤 幸祐 (2013). 複数のランドマーク使用による空間情報の統合と競合 動物心理学研究, 63, 65-77. [✓]
86. Takahashi, Y., Sawa, K., & Okada, T. (2013). The diurnal variation of performance of the novel location recognition task in male rats. *Behavioural Brain Research*, 256, 488-493. [✓]
87. 蔵屋鉄平・澤 幸祐 (2013). 強制水泳試験によるうつ病モデルマウスの現状と課題 専修大学人間科学論集心理学篇, 3, 33-40. [✓]
88. 加藤佑昌・森本麻穂・古田雅明・乾 吉佑 (2013). ロールシャッハ・テストに関するスモール・ステップ式教育方法の検討 専修大学人間科学論集心理学篇, 3, 22-31. [✓]
89. 乾 吉佑 (2013). 吉本侑平論文「リストカットのある青年期男性との心理療法過程」に対する事例コメント 文京学院大学臨床心理相談センター紀要, 11, 37-52.
90. 村松 励 (2013). 精神鑑定におけるジェノグラムの活用について 専修大学人間科学論集心理学篇, 3, 41-49. [✓]
91. 山上精次 (2013). 回想 日本心理学会第 76 回大会 *Annals of Yamagami Laboratory*, 3, 1-3.
92. 山下花緒・榎本玲子・山上精次 (2013). 両耳分離聴による色聴共感覚の検討 専修大学人間科学論集心理学篇, 3, 51-60.
93. 山上精次 (2013). 日本心理学会第 76 回大会を終えて 専修大学人間科学論集心理学篇, 3, 91-108.
94. 吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・牛島廣治 (2013). 育児不安尺度の作成に関する研究 その 1 -4・5 か月児、および、10・11 か月児の母親用モデルー 小児保健研究, 72(5), 680-689.
95. 吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・牛島廣治 (2013). 育児不安尺度の作成に関する研究 その 2 -1 歳半児、および、2 歳児の母親用モデルー 小児保健研究, 72(5), 690-698.
96. 吉田弘道 (2013). 育児不安尺度の作成に関する研究 その 3 -3 歳児、および、4 歳児の母親用モデルー 小児保健研究, 72(6), 780-788.
97. 中田洋二郎・吉田弘道 (2013). 子育て支援とペアレント・トレーニング チャイルドヘルス, 16(11), 758-760.
98. 吉田弘道 (2013). 訪問者に求められる視点とは何か 母子保健 2013 年 7 月号, 4-5.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

99. 石金浩史・長畑 萌 [RA] (2013). ゼブラフィッシュの視運動反応と運動刺激に対する順応 専修人間科学論集心理学篇, 3, 81-87. [✓]
100. 石金浩史 (2013). 網膜からのマルチニューロン記録と行動実験による視覚系の解明 基礎心理学研究, 32(1), 95-100.
101. 岡村陽子 (2013). 高齢の慢性期高次脳機能障害者に対する認知リハビリテーション —認知訓練教室活動報告— 専修大学心理教育相談室年報, 19, 11-13. [✓]
102. 内山愛子・岡村陽子 (2013). 脳の機能障害と気分障害：原疾患による比較 専修人間科学論集心理学篇, 3, 1-10. [✓]
103. 岡村陽子 (2013). 米国における臨床神経心理士 専修大学人文科学研究所月報, 265, 1-12.
104. 岡田謙介 (2013). MULTISCALE による最尤多次元尺度構成法 専修人間科学論集心理学篇, 3, 61-70.
105. *41 Okada, K. (2013). Is omega squared less biased? A comparison of three major effect size indices in one-way ANOVA. *Behaviormetrika*, 40, 1-19. [✓]
106. Sakaiya, S., Shiraito, Y., Kato, J., Ide, H., Okada, K., Takano, K., & Kansaku, K. (2013). Neural correlate of human reciprocity in social interactions. *Frontiers in Decision Neuroscience*, 7(239), doi: 10.3389/fnins.2013.00239. [✓]
107. Kikuchi, Y., Senju, A., Hasegawa, T., Tojo, Y., & Osanai, H. (2013). The effect of spatial frequency and face inversion on facial expression processing in children with autism spectrum disorder. *Japanese Psychological Research*, 118-130. [✓]
108. Senju, A., Vermetti, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., & Hasegawa, T. (2013). Cultural modulation of face and gaze scanning in young children. *PLoS ONE*, 8(8), e74017. [✓]
109. Senju, A., Vermetti, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., Hasegawa, T., & Johnson, M. H. (2013). Cultural background modulates how we look at other persons' gaze. *International Journal of Behavioral Development*, 131-136. [✓]
110. Akechi, H., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2013). Brief Report: Pointing Cues Facilitate Word Learning in Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, DOI:10.1007/s10803-012-1555-3. [✓]
111. Akechi, H., Senju, A., Uibo, H., Kikuchi, Y., Hasegawa, T., & Hietanen, J.K. (2013). Attention to eye contact in the west and east: autonomic responses and evaluative ratings. *PLoS ONE*, DOI:10.1371/journal.pone.0059312. [✓]
112. Ikeda, K., Sugihara, A., & Hasegawa, T. (2013). Fearful faces grab attention in the absence of late affective cortical responses. *Psychophysiology*, DOI:10.1111/j.1469-8986.01478.x. [✓]
113. Sanada, M., Ikeda, K., Kimura, K., & Hasegawa, T. (2013). Motivation enhances visual working memory capacity through the modulation of central cognitive processes. *Psychophysiology*, 50(9), 864-871. [✓]
114. Akechi, H., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2013). Pointing Cues Facilitate Word Learning in Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 43, 230-235. [✓]
115. Usui, S., Senju, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2013). Presence of contagious yawning in children with autism spectrum disorder. *Autism research and treatment*, Article ID971686. [✓]
116. 国里愛彦 (2013). 共同研究の方法 臨床心理学, 13(3), 384-385.
117. 国里愛彦・鈴木伸一 (2013). マインドフルネス/行動活性化療法/弁証法的行動療法 精神科臨床サービス, 13, 212-213.
118. Koseki, S., Noda, T., Yokoyama, S., Kunisato, Y., Ito, D., Suyama, H., Matsuda, T., Sugimura, Y., Ishihara, N., Shimizu, Y.,

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

- Nakazawa, K., Yoshida, S., Arima, K., Suzuki, S. (2013). The relationship between positive and negative automatic thought and activity in the prefrontal and temporal cortices: A multi-channel near-infrared spectroscopy (NIRS) study. *Journal of Affective Disorders*, 151(1), 352-359. [✓]
119. 国里愛彦 (2013). うつとストレスに対する計算論的アプローチ：計算論的精神医学入門 ストレス科学, 28(2), 101-107.
120. Yoshimura, S., Okamoto, Y., Onoda, K., Matsunaga, M., Okada, G., Kunisato, Y., Yoshino, A., Ueda, K., Suzuki, S., & Yamawaki, S. (2013). Cognitive behavioral therapy for depression changes medial prefrontal and ventral anterior cingulate cortex activity associated with self-referential processing. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 9(4), 487-493. [✓]
121. Takagaki, K., Okajima, I., Kunisato, Y., Nakajima, S., Kanai, Y., Ishikawa, S. I., & Sakano, Y. (2013). Preliminary assessment of the behavioral activation model in Japanese undergraduate students. *Psychological reports*, 112(1), 47-59. [✓]
122. 高垣耕企・岡島 義・国里愛彦・中島 俊・金井嘉宏・石川信一・坂野雄二 (2013). Behavioral Activation for Depression Scale (BADs) 日本語版の作成 精神科診断学, 6(1), 76-85. [✓]
123. 桂川泰典・国里愛彦・菅野 純・佐々木和義 (2013). 日本語版セッション評価尺度 (The Japanese Session Evaluation Questionnaire:J-SEQ) 作成の試みーカウンセラー評定による検討ー パーソナリティ研究, 22(1), 73-76. [✓]
124. 高田夏子 (2013). 秘儀荘における女性のイニシエーション 専修大学人文科学研究月報, 266, 63-76.
125. *29 Osada, H., de Amorim, C. A., Velosa, A., Wan, P. W., Lotrakul, P., & Hara, H. (2013). Depression risks in mothers of children with developmental disabilities: a cross-cultural comparison of Brazil, Colombia, Malaysia, and Thailand. *International Journal of Social Psychiatry*, 59, 398-400. [✓]
126. Osada, H. (2013). Internet addiction in Japanese college students: Is Japanese version of Internet Addiction Test (JIAT) useful as a screening tool? 専修人間科学論集心理学篇, 3, 71-80.
127. *49 大久保街亜・鈴木 玄・Nicholls, M. E. R. (2014). 日本語版 FLANDERS 利き手テスト：信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 85, 474-481. [✓]
128. *35 大久保街亜 (2014). 閉じられた ANOVA とその先：心理統計の現状と将来を考える 基礎心理学研究, 32, 215-216. [✓]
129. *48 小林晃洋・大久保街亜 (2014). 日本語版オペレーションスパンテストによるワーキングメモリの測定 心理学研究, 85, 60-68. [✓]
130. *42 石川健太 [RA]・山口美和子・澤 幸祐・高田夏子・大久保街亜 (2014). 対人依存傾向が視線方向判断に与える効果 心理学研究, 85(1), 87-92. [✓]
131. *44 Sawa, K. & Kurihara, A. [RA] (2014). The effect of temporal information among events on Bayesian causal inference in rats. *Frontiers in psychology*, 5, 1142. [✓]
132. Pan, X., Fan, H., Sawa, K., Tsuda, I., Tsukada, M., & Sakagami, M. (2014). Reward Inference by Primate Prefrontal and Striatal Neurons. *The Journal of Neuroscience*, 34, 1380-1396. [✓]
133. Iguchi, Y., Fukumoto, K., Sawa, K., & Ishii, K. (2014). Effects of extended context discrimination training and context extinction on transfer of context dependency of conditioned flavor aversion. *Behavioural processes*, 103, 218-227. [✓]
134. 澤 幸祐・後藤和宏 (2014). 学習理論の学際的展開に思うこと 動物心理学研究, 64(2), 47-49. [✓]
135. 今田 寛・澤 幸祐 (2014). メールインタビュー：今田寛先生に聞く 動物心理学研究, 64(2), 55-61. [✓]
136. 乾 吉佑 (2014). 精神分析をどう学ぶかー発表原稿が生み出されるまでー 精神分析研究, 58(2), 62-69.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

137. 小澤拓大・下斗米淳 (2014). 対人場面における自己抑制と不適応との関連について：研究の概観と今後の展望 専修人間科学論集心理学篇, 4, 21-26.
138. 中島夕湖・下斗米淳・岡本祐子 (2014). 社会的文脈における自尊感情の変動因に関する研究：状態・特性自尊感情の連関メカニズムの理解 広島大学心理学研究, 14, 85-98.
139. 村松 励 (2014). 女子非行と家族 —二重危機構造モデルの視点から— 青少年問題, 6, 2-9.
140. 村松 励 (2014). 立ち直りの手立てとなりにくい家族の問題 児童心理, 65, 96-100.
141. 村松 励 (2014). 犯罪心理学研究と刑事政策 罪と罰, 51, 55-58.
142. 山上精次 (2014). 「心理測定」から「基礎実験 2」へ (1) *Annals of Yamagami Laboratory*, 4, 1-3.
143. 吉田弘道 (2014). 小特集 子育て支援と乳幼児の遊び —心理学の立場から— 子育て支援と心理臨床, 8, 69-74.
144. 吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・牛島廣治 (2014). 育児不安尺度の作成に関する研究 —因子間相関について— 専修人間科学論集心理学篇, 4, 39-44.
145. 長畑 萌 [RA]・石金浩史 (2014). 情動ストループ課題による摂食障害研究の現状と課題 専修人間科学論集心理学篇, 4, 11-20. [✓]
146. *36 岡田謙介 (2014). ベイズ統計による情報仮説の評価は分散分析にとって代わるのか？ 基礎心理学研究, 32, 223-231. [✓]
147. Nishiyama, T., Suzuki, M., Adachi, K., Sumi, S., Okada, K., Kishino, H., Sakai, S., Kamio, Y., Kojima, M., Suzuki, S., Gruber, C. P., Constantino, J. N., & Kanne, S. M. (2014). Comprehensive comparison of self-administered questionnaires for measuring quantitative autistic traits in adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 44, 993-1007. [✓]
148. Akechi, H., Stein, T., Senju, A., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2014). Absence of preferential unconscious processing of eye contact in adolescents with autism spectrum disorder. *Autism Research*, 7, 590-597. [✓]
149. Akechi, H., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2014). Neural and behavioural responses to face-likeness of objects in adolescents with autism spectrum disorder. *Scientific Reports*, 4, 3847. [✓]
150. Saito, A., Hamada, H., Kikusui, T., Mogi, K., Nagasawa, M., Mitsui, S., Higuchi, T., Hasegawa, T., & Hiraki, K. (2014). Urinary oxytocin positively correlates with performance in facial visual search in unmarried males, without specific reaction to infant face. *Frontiers in neuroscience*, 8, 217. [✓]
151. Machino, A., Kunisato, Y., Matsumoto, T., Yoshimura, S., Ueda, K., Yamawaki, Y., Okada, G., Okamoto, Y., & Yamawaki, S. (2014). Possible involvement of rumination in gray matter abnormalities in persistent symptoms of major depression: an exploratory magnetic resonance imaging voxel-based morphometry study. *Journal of Affective Disorders*, 168, 229-235. [✓]
152. Yoshino, A., Okamoto, Y., Kunisato, Y., Yoshimura, Y., Jinnin, R., Hayashi, Y., Kobayakawa, M., Doi, M., Oshita, K., Nakamura, R., Tanaka, K., Yamashita, H., Kawamoto, M., & Yamawaki, S. (2014). Distinctive spontaneous regional neural activity in patients with somatoform pain disorder: A resting-state fMRI preliminary study. *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 221(3), 246-248. [✓]
153. Toki, S., Okamoto, Y., Onoda, K., Matsumoto, T., Yoshimura, S., Kunisato, Y., Okada, G., Shishida, K., Kobayakawa, M., Fukumoto, T., Machino, A., Inagaki, M., & Yamawaki, S. (2014). Hippocampal activation during associative encoding of word pairs and its relation to symptomatic improvement in depression: A functional and volumetric MRI study. *Journal of Affective Disorders*, 152, 462-467. [✓]
154. 岡田 剛・岡本泰昌・志々田一宏・上田一貴・小野田慶一・国里愛彦・田中沙織・銅谷賢治・山脇成人 (2014). うつ病の脳内メカニズム：Functional MRI を用いた検討 精神神経学雑誌, 116(10), 825-831.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

155. 国里愛彦・岡本泰昌・吉村晋平・松永美希・岡田 剛・吉野敦雄・小野田慶一・上田一貴・鈴木伸一・山脇成人 (2014). うつ病の認知行動療法の脳内作用メカニズムと今後の展開 *Depression Frontier*, 12(2), 41-45.
156. 巢山晴菜・兼子 唯・伊藤理紗・横山仁史・伊藤大輔・国里愛彦・貝谷久宣・鈴木伸一 (2014). 重症社交不安障害患者における拒絶に対する過敏性とうつ症状が社交不安症状に与える影響性の検討 *不安障害研究*, 6(1), 7-16. [✓]
157. 国里愛彦・岡本泰昌・吉村晋平・松永美希・岡田 剛・吉野敦雄・小野田慶一・上田一貴・鈴木伸一・山脇成人 (2014). うつ病における認知行動療法の神経作用メカニズム *ストレス科学*, 29(1), 45-54.
158. 高田夏子 (2014). 森茉莉とその少女性について *専修大学人間科学論集心理学篇*, 4, 27-38.
159. 乾 吉佑 (2014). ものを通して知る心 ―精神分析的援助論― *音楽療法研究*, 4, 21-27.
160. 岡村陽子・武藤かおり (2014). 高次脳機能障害者のセルフアウェアネスと心理的ストレスの関連の検討 *専修大学人間科学論集心理学篇*, 4, 1-9.
161. 乾 吉佑 (2015). 逸見聖也論文「自己愛人格傾向をもったクライアントとの面接過程」に対するコメント *文京学院大学臨床心理相談センター紀要*, 13, 37-54. [✓]
162. Okubo, M., Ishikawa, K. [PD], Kobayashi, A., Laeng, B., & Tommasi, L. (2015). Cool guys and warm husbands: The effect of smiling on male facial attractiveness for short- and long-term relationships. *Evolutionary Psychology*, 13, 1474704915600567.
163. 村松 励 (2015). 書評：家裁調査官から見た現代の非行と家族―司法臨床の現場から *精神療法*, 41(5), 136-137.
164. 石黒良和・榎本玲子・山上精次 (2015). 幼児の感情的役割取得と対人問題解決から予測される対人行動 *専修大学人間科学論集 心理学篇*, 5, 1-14.
165. 山上精次 (2015). 「心理測定」から「基礎実験 2」へ (2) *Annals of Yamagami Laboratory*, 5, 1-12.
166. 吉田弘道 (2015). 子育て支援と発達臨床心理学 ―発達精神病理学の視点を加えて― *専修大学人間科学論集心理学篇*, 5, 31-40.
167. 吉田弘道 (2015). 小特集「子育て支援と発達精神病理学」にあたって *子育て支援と心理臨床*, 10, 68.
168. 吉田弘道 (2015). 子どものまとまっている心を育てる子育て支援 (小特集「子育て支援と発達精神病理学」にあたって) *子育て支援と心理臨床*, 10, 77-82.
169. 吉田弘道 (2015). Book Review 「遊びからみえる子どものこころ (日本遊戯療法学会編 日本評論社)」 *児童心理学* 12月号, 126.
170. 吉田弘道 (2015). 書評「発達精神病理学からみた精神分析理論」 *精神分析研究*, 59(2), 253-255.
171. 佐藤 駿・中沢 仁 (2015). 短時間順応下での時間知覚 ―方位選択的処理の寄与― *基礎心理学研究*, 34, 45-52.
172. Akechi, H., Stein, T., Kikuchi, Y., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2015). *Preferential awareness of protofacial stimuli in autism. Cognition*, 143, 129-134.
173. Romero, T., Nagasawa, M., Mogi, K., Hasegawa, T., & Kikusui, T. (2015). Intranasal administration of oxytocin promotes social play in domestic dogs. *Communicative & Integrative Biology*, 8(3), e1017157.
174. Sanada, M., Ikeda, K., & Hasegawa, T. (2015). Shape and spatial working memory capacities are mostly independent. *Frontiers in Psychology*, 6, 581.
175. 国里愛彦 (2015). 系統的展望とメタアナリシスの必須事項 *行動療法研究*, 41(1), 3-12.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

176. Nishiyama, Y., Okamoto, Y., Kunisato, Y., Okada, G., Yoshimura, S., Kanai, Y., Yamamura, T., Yoshino, A., Jinnin, R., Takagaki, K., Onoda, K., & Yamawaki, S. (2015). fMRI Study of Social Anxiety during Social Ostracism with and without Emotional Support. *PLoS ONE*, *10*(5), e0127426.
177. Tsukue, R., Okamoto, Y., Yoshino, A., Kunisato, Y., Takagaki, K., Takebayashi, Y., Tanaka, K., Konuma, K., Tsukue, I., & Yamawaki, S. (2015). Do Individuals With Alcohol Dependence Show Higher Unfairness Sensitivity? -The Relationship Between Impulsivity and Unfairness Sensitivity in Alcohol-Dependent Adults-. *Alcoholism, clinical and experimental research*, *39*(10), 2016-2021.
178. 小川祐子・武井優子・古賀晴美・島田真衣・長尾愛美・佐々木美保・国里愛彦・谷川啓司・鈴木伸一 (2015). 補完代替療法をうける外来がん患者を対象とした主治医と話すことへのためらいの構成概念の検討 心身医学, *55*(7), 873-883.
179. 大久保街亜 (2015). 統計学的に有意？帰無仮説検定でわかること・わからないこと 心理学ワールド, *68*, 17-20.
180. 古内さや子・長田洋和 (2015). 就学前児のレジリエンスが問題行動に及ぼす影響 専修人間科学論集心理学篇, *5*, 23-29.
181. 岡村陽子 (2015). 高齢高次脳機能障害者の QOL 及びウェルビーイングに影響を与える要因 専修大学人文科学研究所・人文科学年報, *45*, 89-105.
182. *47 松崎みどり・矢吹美帆・中沢 仁・石金浩史 (2015). 運動刺激順応後に観察される視運動反応の変化 日本神経回路学会第 25 回全国大会講演論文集. [✓]
183. 岡田謙介 (in press). ベイズ推定による情報仮説の評価：その理論と各種モデルへの応用について 専修人間科学論集心理学篇, *6*.
184. 伊藤理紗・兼子 唯・巢山晴菜・佐藤秀樹・横山仁史・国里愛彦・鈴木伸一 (in press). 単一恐怖症状の高い大学生における、エクスポージャー中の安全確保行動の効果 行動療法研究.
185. *53 Osada, H. (in press). Literacy of Autism Spectrum Disorder among primary and junior high school teachers in Japan. *Social Science & Medicine*. [✓]
186. *54 Osada, H. (in press). Callous-Unemotional Traits in Japanese children. *Journal of the American Academy of Psychiatry and the Law*. [✓]
187. 波田野結花・吉田弘道・岡田謙介 (in press). 教育心理学研究における p 値と効果量による解釈の違い 教育心理学研究. [✓]
188. *55 Okada, K. (in press). Bayesian meta-analysis of Cronbach's alpha to evaluate informative hypotheses. *Research Synthesis Methods*. [✓]

<図書>

◎書籍の著・編・訳の場合

著者 or 編者 or 訳者 (刊行年). 『書籍タイトル』 出版社名

◎編集書中の特定章の著 or 編 or 訳を担当している場合

著者 or 編者 or 訳者 (刊行年). 「対象章タイトル (該当ページ)」 編者 『書籍タイトル』 出版社名

1. 大久保街亜 (2011). 「実験心理学をやってきた (pp.294-295)」 井上孝代・山崎 晃・藤崎眞知代 (編) 『心理支援論 ―心理学教育の新スタンダード構築をめざして』 風間書房

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

2. 道又 爾・北崎充晃・大久保街亜・今井久登・山川恵子・黒沢 学 (2011). 『認知心理学：知のアーキテクチャを探る 新版』 有斐閣
3. 澤 幸祐 (2011). 「第 1 章：古典的条件づけ (pp.16-40)」 廣中直行 (編) 『心理学研究法 3 学習・動機・情動』 誠信書房
4. *4 澤 幸祐・栗原 彬 [RA]・永石高敏・沼田恵太郎 (2011). 「第 3 章：学習と認知：随伴性判断を中心に (pp.69-92)」 廣中直行 (編) 『心理学研究法 3 学習・動機・情動』 誠信書房
5. 吉田弘道 (2011). 「地域の専門家とは (pp.86-92)」 一般社団法人日本保育学会・保育臨床相談システム検討委員会 (編) 『地域における保育臨床相談のあり方：協働的な保育支援をめざして』 ミネルヴァ書房
6. 吉田弘道 (2011). 「子どもの心理療法—遊戯療法 (pp.296-297)」 日本心理臨床学会 (編) 『心理療法学事典』 丸善出版
7. 吉田弘道 (2011). 「幼児性欲 (pp.1039-1040)」 加藤 敏・神庭重信・中谷陽二・武田雅俊・鹿島晴雄・狩野力八郎・市川宏伸 (編著) 『現代精神医学事典』 弘文堂
8. 岡田謙介 (訳) (2011). 「第 3 章 確率一致事前分布 (pp.93-118)」 「第 21 章 頑健ベイズ分析 (pp.647-694)」 Dey, D. K. & Rao, C. R. (編) 繁榭算男・岸野洋久・大森裕浩 (監訳) 『ベイズ統計分析ハンドブック』 朝倉書店
9. 乾 吉佑 (2011). 『働く人と組織のためのこころの支援 —メンタルヘルス・カウンセリングの実際—』 遠見書房
10. *1 大久保街亜・岡田謙介 (2012). 『伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力』 勁草書房
11. 黒澤 香・村松 励 (2012). 『非行・犯罪・裁判』 新曜社
12. 岡村陽子 (訳) (2012). 「第 3 章：神経学的・神経行動学的回復に関係する要因 (pp.47-72)」 「第 9 章：アウェアネスの障害の評価と管理 (pp.227-258)」 Sohlberg, M. M. & Mateer, C. A. (著) 尾崎誠・上田幸彦 (監訳) 『高次脳機能障害のための認知リハビリテーション ～統合的な神経心理学的アプローチ～』 協同医書出版
13. 千野直仁・佐部利真吾・岡田謙介 (2012). 『非対称 MDS の理論と応用』 現代数学社
14. 松本聡子・松浦素子・尾崎幸謙・室橋弘人・高橋雄介・岡田謙介・山形伸二 (訳) (2012). 『縦断データの分析 I —変化についてのマルチレベルモデリング—』 Singer, J. D. & Willett, J. B. (著) 菅原ますみ (監訳) 朝倉書店
15. 長谷川寿一・長谷川真理子 (2012). 「II-1：進化と発達」 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (編) 『発達科学入門 1 理論と方法』 東京大学出版会
16. 澤 幸祐 (2013). 『行動生物学辞典』 上田恵介・岡ノ谷一夫・菊水健史・坂上貴之・辻 和希・友永雅己・中島定彦・長谷川寿一・松島俊也 (編) 東京化学同人
17. 乾 吉佑 (2013). 『心理臨床家の成長』 金剛出版
18. 飛田 操・下斗米淳・風間文明・角尾美奈 (2013). 「世間に対する自己機能」 世間心理学研究会 (編) 『自己・他者・「世間」の心理学』 学習院大学人文科学研究所
19. 村松 励 (2013). 「非行集団と結びつきのある時の指導 —関係機関との連携— (pp.3-15)」 今井五郎・嶋崎政男・渡部邦雄 (編) 『学校教育相談の理論・実践事例集 いじめの解明』 第一法規
20. 吉田弘道 (2013). 『心理相談と子育て支援に役立つ親面接入門』 福村出版
21. 吉田弘道 (2013). 「心の発達と保育者のかかわり (pp.27-37)」 中村 敬 (監修) 『育児サポート 3』 一般社団法人 女性労働協会

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

22. 岡田謙介 (2013). 「第7章 人文科学分野キーワード (pp.193-215)」 日本統計学会 (編) 『日本統計学会公式認定 統計検定1級対応 統計学』 東京図書
23. 長田洋和 (2014). 「ロヴァス法・応用行動分析療法・アンガーマネジメント (pp.91-93)」 原 仁・上野一彦・笹森洋樹・高橋あつ子 (編) 『最新 子どもの発達障害事典』 合同出版
24. 澤 幸祐 (2014). 『誠信心理学辞典』 下山晴彦 (編集代表) 誠信書房
25. 下斗米淳 (2014). 「第6章 対人関係の親密化と悩ましさの発生メカニズム (pp.91-106)」 中里至正・松井 洋・中村 真 (編) 『新・社会心理学の基礎と展開』 八千代出版
26. 吉田弘道 (2014). 「子どものこころ, こころの発達とは何か (pp.2-11)」 中村和彦 (編) 『子どものこころの医学』 金芳堂
27. 吉田弘道 (2014). 「第6章 こころ (pp. 111-127)」・「第7章 遊び (pp.136-143)」 衛藤隆・近藤洋子・杉田克生・村田光範 (編) 『新しい時代の子どもの保健』 小児医事出版社
28. 吉田弘道 (2014). 「食を通じた心のケア (pp.58-63)」 向井美恵・井上美津子・安井利一・眞木吉信・深井稜博・上田耕一郎 (編) 『健康寿命の延伸をめざした口腔機能への気づきと支援 ーライフステージごとの機能を守り育てるー』 医歯薬出版株式会社
29. 吉田弘道 (2014). 「遊戯療法 (プレイセラピー) とはなんですか? カウンセリングとはなんですか? (pp.90-91)」 原 仁 (責任編集) 『最新子どもの発達障害事典』 合同出版
30. 松本聡子・室橋弘人・山形伸二・尾崎幸謙・松浦素子・高橋雄介・岡田謙介・宇佐美慧 (訳) (2014). 『縦断データの分析II ーイベント生起のモデリングー』 Singer, J. D. & Willett, J. B. (著) 菅原ますみ (監訳) 朝倉書店
31. 大久保街亜 (2015). 「カテゴリカル・データの分析 (pp.172-187)」・「効果量 (pp.200-214)」・「検定力 (pp.215-227)」・「メタ分析 (pp.228-242)」 小野寺孝義 (編) 『新訂 心理・教育統計法特論』 NHK 出版
32. 大久保街亜 (2015). 「神経心理学的テスト: 行動から脳機能を測定する (pp.262-273)」 日本心理学会認定心理士資格認定委員会 (編) 『認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎』 金子書房
33. 澤 幸祐 (2015). 「食べ物の好き嫌いはある? (p.37)」 日本動物心理学会 (監修) 藤田和生 (編著) 『動物たちは何を考えている? 動物心理学の挑戦』 技術評論社
34. 関口勝夫・牛谷智一・澤 幸祐 (2015). 「コラム3 スニッフィー (ソフトウェアを用いた仮想動物) による比較心理学の実習 (pp.102-105)」 日本心理学会・認定心理士資格認定委員会 (編) 『認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎』 金子書房
35. 澤 幸祐・牛谷智一 (2015). 「コラム7 動物の行動観察 (pp.221-223)」 日本心理学会・認定心理士資格認定委員会 (編) 『認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎』 金子書房
36. 澤 幸祐 (2015). 『動物たちは何を考えている? ー動物心理学の挑戦ー』 日本動物心理学会 (監修)・藤田和生 (編著) 技術評論社
37. 山上精次・藤岡新治・下斗米淳 (編) (2015). 『[[四訂版] 図説 現代心理学入門』 金城辰夫 (監修) 培風館
38. 岡田謙介 (2015). 「第10章 効果量のバイアスを調べるシミュレーション研究 (pp.228-249)」 山田剛史 (編) 『Rによる心理学研究法入門』 北大路書房
39. 吉田弘道 (2015). 「子どものこころの発達 (pp.41-59)」 滝口俊子 (編) 『子育て支援のための保育カウンセリング』 ミネルヴァ書房

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

40. 国里愛彦 (2015). 「行動医学と生物統計学 (pp.73-78)」 野村忍・堤明純・島津明人・中尾睦宏・吉内一浩 (編) 『行動医学テキスト』 中外医学社
41. 長田洋和・栗田 広 (2015). 「第 4 章 精神科臨床評価 ー特定の精神障害に関連したもの 知的能力障害 (知的発達症/知的発達障害)」 臨床精神医学編集委員会 (編) 『臨床精神医学 44 巻増刊号』 アークメディア

<学会発表>

◎発表者 (発表年). 発表タイトル 学会名 開催場所.

◎通し番号と著者名間の「*番号」は、11(4)に対応する研究成果を示す。

◎平成 23 年度

1. 乾 吉佑・田中健夫 (2011). ワークショップ「実践から研究へ」 第 29 回日本学生相談学会大会, 立教大学.
2. Ishikane, H. (2011). The motion after-effect in the optomotor response of zebrafish. Vision Science Society 11th Annual Meeting, Naples, Florida, USA.
3. Harasawa, M. & Ishikane, H. (2011). Continuously moving RSVP task revealed neuronal activities related to position of spatial attention: an fNIRS study. Vision Science Society 11th Annual Meeting, Naples, Florida, USA.
4. 岡田謙介 (2011). 信頼性係数の比較と評価 日本計算機統計学会第 25 回大会, 北海道.
5. Usui, S., Senju, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., Tojo, Y., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2011). Induction of Contagious Yawning in Children with ASD with Gaze-Contingent Stimulus Display. 10th International Meeting for Autism Research, San Diego, USA.
6. 吉田弘道 (2011). 遊戯療法の基礎と実践 第 105 回日本小児精神神経学会 (第 9 回研修セミナー), 新潟.
7. 岡村陽子 (2011). 知能検査 (WAIS-III) 担当講師 第 2 回 こころと脳の臨床研究会, 東京.
8. Takai, Y., Nakazawa, H., Kato, M., Kamatani, Y., and Kitazaki, M. (2011). Neural decoding of 5 leaning directions in motor imagery from event-related potentials. 17th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Québec City, Canada.
9. Okada, K. (2011). An empirical comparison of methods for estimating reliability. The 76th annual and the 17th International Meeting of the Psychometric Society, Hong Kong.
10. 岡田謙介 (2011). 小標本における分散分析の各種効果量について 日本教育心理学会第 53 回総会, 北海道.
11. *8 石金浩史・榎本ゆかり (2011). 視運動反応における運動残効と神経活動 視覚科学フォーラム第 15 回研究会, 大阪大学.
12. 岡村陽子 (2011). 記憶検査 (WMS-R) 担当講師 第 4 回 こころと脳の臨床研究会, 町田.
13. Okada, K. (2011). A Bayesian approach to asymmetric multidimensional scaling. 58th World Statistics Congress of the International Statistical Institute, Dublin, Ireland.
14. 大久保街亜 (2011). 左バイアス : 右半球 vs. 読みの習慣 日本心理学会第 75 回大会ワークショップ, 日本大学.
15. 大久保街亜 (2011). 映画とラジオと座席選択 : 脳から行動の左右差を探る 日本心理学会第 75 回大会ワークショップ, 日本大学.
16. 小林晃洋・大久保街亜 (2011). 社会的プレッシャーがワーキングメモリに及ぼす影響の個人差 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

17. 石川健太 [RA]・大久保街亜 (2011). 社会不安傾向者の脅威刺激に対する選択的注意とその時間特性 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学.
18. 乾 吉佑 (2011). 学会賞講演「F さん (自閉症) との 40 年間の精神分析的な心理療法から学んだもの」 第 30 回日本心理臨床学会大会, 福岡国際会議場.
19. 小澤拓大・下斗米淳 (2011). 他者のための自己犠牲の効果とその規定因の検討 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学.
20. 小澤拓大・瀧澤 純・山下利之・下斗米淳 (2011). 他者の心の推測における固有情報使用 の抑制要因の検討 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学.
21. 角尾美奈・飛田 操・下斗米淳・風間文明 (2011). 世間に対する自己機能(3): 自他の整合・不整合事態における世間伝播機能の検討 日本社会心理学会第 52 回大会, 名古屋大学.
22. 風間文明・下斗米淳・飛田 操・角尾美奈 (2011). 世間に対する自己機能(4): 世間への適応反応の検討 日本社会心理学会第 52 回大会, 名古屋大学.
23. 山岡重行・清水 裕・下斗米淳 (2011). 自己制御規範と世間イメージ 日本社会心理学会第 52 回大会, 名古屋大学.
24. 山岡重行・清水 裕・下斗米淳 (2011). 自己制御規範顕現性の個人差と世間を意識する状況 日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会, 京都光華女子大学.
25. 岡田謙介 (2011). ベイズ推定による非対称 MDS 日本行動計量学会第 39 回大会, 岡山理科大学.
26. 岡田謙介 (2011). 因子数が明らかでない場合の信頼性のベイズ推定 日本テスト学会第 9 回大会, 岡山大学.
27. 岡田謙介 (2011). 因子分析モデルの averaging による信頼性推定 2011 年度統計関連学会連合大会, 九州大学.
28. 岡田謙介 (2011). 発達・老化の縦断データ解析のための混合軌跡モデリング (ワークショップ「発達・老化のダイナミクスと個人差を捉える新しい縦断データ分析法 - 潜在クラス軌跡分析を中心に -) 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学.
29. *7 Sawa, K. (2011). Associative basis of causal reasoning in animals and humans. Seventh Biennial Meeting of the Cognitive Development Society, Philadelphia, USA.
30. 室田尚哉・板坂典郎・宮田久嗣・北角和浩・澤 幸祐・中山和彦 (2011). ドパミンアゴニストによる衝動制御障害の神経学的機序に関する基礎的研究 第 21 回日本臨床精神神経薬理学会・第 41 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京王プラザホテル.
31. 室田尚哉・吉田拓真・板坂典郎・宮田久嗣・澤 幸祐・中山和彦 (2011). ラットの衝動的行動におよぼすニコチンの効果 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 愛知県産業労働センター.
32. 乾 吉佑 (2011). 精神分析と箱庭 日本箱庭療法学会第 25 回シンポジウム, 東京国際フォーラム.
33. 吉田弘道 (2011). 乳児期における感覚・運動遊びの重要性: 共感的対人関係の形成のために 日本遊戯療法学会第 17 回大会シンポジウム, 仙台.
34. 石金浩史 (2011). 招待講演「マルチニューロン記録と行動実験による小型脊椎動物における視覚系の研究」 私大戦略的研究基盤形成支援事業「網膜回路」総研プロジェクトセミナー 立命館大学 BKC.
35. 岡村陽子 (2011). 高次脳機能障害者の社会的行動障害 茨城県高次脳機能障害者支援従事者研修会, 茨城.
36. 岡村陽子 (2011). 記憶検査 (リバーミード他) 担当講師 第 6 回 こころと脳の臨床研究会, 東京.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

37. *6 Okubo, M. (2011). A fake smile thwarts cheater detection. The 52nd annual meeting of Psychonomic Society, Seattle, WA, USA.
38. Okubo, M. (2011). No attentional blink during arithmetic. Object Perception, Attention, & Memory 2011, Seattle, WA, USA.
39. 大久保街亜 (2011). 表情の文脈が注意に与える影響 第 29 回日本基礎心理学会大会, 関西学院大学.
40. *6 Sawa, K., Murota, N., & Miyata, H. (2011). The effect of nicotine on rats' impulsive and timing behavior. The 52nd Annual Meeting of Psychonomic Society, Seattle, WA, USA.
41. 吉田弘道 (2011). 子どもの心理相談における親面接の基礎と実践 第 106 回日本小児精神神経学会 (第 10 回研修セミナー), 浜松.
42. 岡村陽子 (2011). BRIEF 日本版における因子分析的検討 第 35 回日本高次脳機能障害学会学術総会, 鹿児島.
43. 長田洋和 (2011). ニューヨークにおける自閉症スペクトラム障害への早期介入の実際とわが国への応用の可能性 第 21 回日本乳幼児医学・心理学会 会長講演, 専修大学.
44. 大久保街亜 (2011). 処理資源の割りあてによる Attentional Blink の抑制 日本基礎心理学会第 30 回大会, 慶應義塾大学.
45. 栗原 彬 [RA]・山上精次・澤 幸祐 (2011). 反応時間課題における主観的予測と行動の乖離: 延滞条件づけと痕跡条件づけを用いた検討 日本基礎心理学会第 30 回大会, 慶應義塾大学.
46. 榎本玲子・山上精次 (2011). 身体近傍空間知覚における道具仕様の影響に関する検討 日本基礎心理学会第 30 回大会, 慶應義塾大学.
47. 石金浩史・榎本ゆかり (2011). 小型脊椎動物の視運動反応を用いた運動残効の神経基盤に関する研究 日本基礎心理学会第 30 回大会, 慶應義塾大学.
48. Okada, K. (2012). Bayesian inequality constrained multidimensional scaling. The 4th International Conference of the ERCIM Working Group on Computing & Statistics, London, UK.
49. Okada, K. (2012). Bayesian analysis of asymmetry by the slide-vector model. 4th Japanese-German Symposium on Classification, Doshisha University.
50. 明地洋典・菊池由葵子・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2012). 自閉症児と定型発達児における通状況的統計的語彙学習 第 23 回日本発達心理学会大会, 名古屋国際会議場.
51. 臼井さおり・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2012). 自閉症児と定型発達児における模倣対象の選択に関する検討 第 23 回日本発達心理学会大会, 名古屋国際会議場.
52. 菊池由葵子・明地洋典・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2012). 自閉症児・定型発達児における顔からの注意の解放 - サッケード関連電位による検討 (2) - 第 23 回日本発達心理学会大会, 名古屋国際会議場.
- ◎平成 24 年度
53. *19 宮下 遥・栗原 彬 [RA]・澤 幸祐 (2012). ラットの強制水泳手続きにおける恐怖反応の再発に及ぼす影響 日本動物心理学会第 72 回大会, 関西学院大学.
54. 荏原実千代・太田令子・岡村陽子・中島八十一・吉永勝訓 (2012). 小児期発症の高次脳機能障害の支援実態調査報告 1 - 障害像 第 49 回日本リハビリテーション医学会学術集会, 福岡.
55. 岡田謙介 (2012). 直積空間法によるベイズファクターを用いた多次元尺度モデルの選択 日本計算機統計学会第 26 回大会, 香川県社会福祉総合センター.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

56. Akechi, H., Kikuchi, Y., Tojo, T., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2012). Cross-situational word learning in children with ASD. 11th International Meeting for Autism Research, Canada.
57. Kikuchi, Y., Tojo, T., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2012). Eye contact enhances the accuracy of hand imitation in children with ASD. 11th International Meeting for Autism Research, Canada.
58. Senju, A., Vermetti, A., Kikuchi, Y., Akechi, H., Hasegawa, T., & Johnson, M. (2012). The effect of cultural background on face and gaze scanning: An eye-tracking study. 1st Conference of the European Society for Cognitive and Affective Neuroscience, France.
59. ***18** Okubo, M. (2012). Leftward attentional biases in Framed-line Test among East Asians. The International Neuropsychological Society mid-year meeting in Norway 2012, Oslo, Norway.
60. Okada, K. (2012). Bayesian model averaging in factor analysis to estimate factor reliability. International Society for Bayesian Analysis 2012 World Meeting, Kyoto Terra.
61. 原澤賢充・南部政智・北崎充晃・石金浩史 (2012). 差動皮質応答による空間的注意位置関連領域の同定：fNIRSによる研究 第20回VR心理学研究会，室蘭工業大学.
62. Okada, K. & Mayekawa, S. (2012). Dealing with Rotational indeterminacy in Multivariate Bayesian Models. The 2nd Institute of Mathematical Statistics Asia Pacific Rim Meeting, Tsukuba International Conference Center.
63. Okada, K. (2012). Estimation of Reliability: A Bayesian Model Averaging Approach. The 77th annual and the 18th International Meeting of the Psychometric Society, Lincoln, USA.
64. Mayekawa, S. & Okada, K. (2012). Expanded Orthogonal Procrustes Transformation and its Applications to Individual Differenced Multidimensional Scaling and Multiple-Group Factor Analysis. The 77th annual and the 18th International Meeting of the Psychometric Society, Lincoln, USA.
65. 岡田謙介・前川眞一 (2012). 多群探索的構造方程式モデリングにおける一般化拡大プロクラステス回転 統計サマーセミナー2012, 伊豆山研修センター.
66. 長田洋和 (2012). 少年非行と発達障害 日本心理学会第76回大会シンポジウム，専修大学.
67. 石川健太 [RA]・大久保街亜 (2012). 社会不安傾向者の表情認知における左右大脳半球機能 日本心理学会第76回大会，専修大学.
68. 小林晃洋・大久保街亜 (2012). 認知負荷量の測定とモダリティ効果 日本心理学会第76回大会，専修大学.
69. 鈴木 玄・大久保街亜 (2012). 注意の瞬きにおける知覚的負荷の効果 日本心理学会第76回大会，専修大学.
70. 下斗米淳 (2012). Geoff MacDonald 招待講演企画「Social Pain and Social Reward」 日本心理学会第76回大会，専修大学.
71. ***24** 下斗米淳 (2012). シンポジウム企画・指定討論「健康行動促進をめざしたリスク認知とヘルスコミュニケーション」 日本心理学会第76回大会，専修大学.
72. 下斗米淳 (2012). ワークショップ指定討論「現代青年の成熟とは何か」 日本心理学会第76回大会，専修大学.
73. ***25** 藤岡新治 (2012). 学会シンポジウム企画・司会「日本のEAPの現状と今後の課題」 日本心理学会第76回大会，専修大学.
74. ***26** 村松 励 (2012). シンポジウム企画・司会・指定討論「少年非行と発達障害」 日本心理学会第76回大会，専修大学.
75. 山上精次・高砂美樹・サトウタツヤ・鷺見成正・溝口 元 (2012). 1912年とこの100年の心理学の展開 日本心

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

理学会第 76 回大会シンポジウム, 専修大学.

76. Harasawa, M., Nambu, M., Kitazaki, M., & Ishikane, H. (2012). Differential phase-encoded method revealed location of spatial attention-related activities in parietal, temporal and occipital cortex: an fNIRS study. ECVP2012, Alghero, Italy.
77. *21 Nagahata, M. [RA], Okamura, Y., & Ishikane, H. (2012). Attentional bias for body and food in healthy females. The 35th Annual Meeting of Japan Neuroscience Society, Nagoya Congress Center.
78. 長畑 萌 [RA]・石金浩史 (2012). 健常女性における身体・食物に関する認知の研究 日本心理学会第 76 回大会, 専修大学.
79. Okada, K. (2012). A Bayesian Asymmetric MDS for the Radius-Distance Model. Joint meeting of Japanese and Italian Classification Societies 2012, Anacapri, Italy.
80. 下斗米淳 (2012). シンポジウム指定討論「自己制御規範の心理学: 3次元自己制御モデルの観点からの議論」日本パーソナリティ心理学会第 21 回大会, 島根県民会館.
81. 村松 励 (2012). シンポジウム指定討論「非行化した少年の育ち直しをどのように支えるのか - 児童自立支援施設における支援の実態 -」日本カウンセリング学会第 45 回大会, 麗澤大学.
82. *20 大久保街亜・小林晃洋・石川健太 [RA] (2012). 裏切りものの検知に表情表出の左右非対称性が果たす役割 日本基礎心理学会第 31 回大会, 九州大学.
83. 藤岡新治 (座長)・小川真紀・荒川和歌子 (2012). 単回性 PTSD と複雑性 PTSD のロールシャッハ・テスト反応 日本ロールシャッハ学会第 16 回大会, 明治大学.
84. *20 榎本玲子・山上精次 (2012). 道具使用による身体近傍空間の拡張の様相に関する研究 日本基礎心理学会第 31 回大会, 九州大学.
85. *27 岡田謙介 (2012). 心理学研究における効果量の活用と報告 -APAの指針をふまえて- 日本教育心理学会第 54 回総会チュートリアルセミナー, 琉球大学.
86. 岡田謙介 (2012). 非対称半径距離モデルのベイズ推定とモデル選択 日本計算機統計学会第 26 回シンポジウム, 東京大学.
87. 野寄茉莉・安藤寿康・長谷川壽一 (2012). 幼児期の双生児のきょうだい関係について 日本教育心理学会第 54 回総会, 琉球大学.
88. 大久保街亜 (2012). 日本語版オペレーション・スパン・テストの開発 第 10 回日本ワーキングメモリ学会大会, 京都大学.
89. Okada, K. (2012). Bayesian evaluation of asymmetry in multidimensional scaling. The 5th International Conference of the ERCIM Working Group on Computing & Statistics, Oviedo, Spain.
90. 新井さくら・長谷川壽一 (2012). サイコパシーは適応的戦略と見なせるか: Life History 戦略及びホルモンとの関連から 日本人間行動進化学会第 5 回大会, 東京大学.
91. 野寄茉莉・藤澤啓子・安藤寿康・長谷川壽一 (2013). 幼児期のふたごはどのように関わるのか~首都圏ふたごプロジェクト家庭訪問調査から見えてきたこと 日本双生児研究学会第 27 回学術講演会, 慶應義塾大学.
92. 新井さくら・長谷川壽一 (2013). サイコパシー特性は適応的戦略か: Life History 戦略、ホルモン、身体的魅力との関連 文部科学省特定領域研究総括シンポジウム, 学術総合センター.
93. 新井さくら・長谷川壽一 (2013). サイコパシーという特性がなぜ存在するか: Life History 戦略及びホルモンとの関連から 第 2 回社会神経科学研究会, 自然科学研究機構.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

94. Sekiguchi, K. [PD], Ushitani, T., & Sawa, K. (2013). The use of multiple landmarks by humans (*Homo sapiens*) in open-field search task. The 20th Annual International Conference on Comparative Cognition, Melbourne, Florida, USA.
95. Miyashita, H., Kurihara, A. [RA], & Sawa, K. (2013). Effects of forced swim procedure on renewal of conditioned fear response in rats. The 20th Annual International Conference on Comparative Cognition, Melbourne, Florida, USA.
96. *15 石金浩史 (2013). 網膜からのマルチニューロン記録と行動実験による視覚系の解明 日本基礎心理学会 2012 年度第 2 回フォーラム (招待講演), 豊橋商工会議所.
97. 岡田謙介 (2013). 仮説検定の限界を乗り越えるためのベイズ統計学 日本行動計量学会 第 15 回春の合宿セミナー, 東海大学.
98. 明地洋典・菊池由葵子・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2013). 自閉症スペクトラム者はモノの中に顔を見るか? 第 24 回日本発達心理学会大会, 明治学院大学.
99. 菊池由葵子・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2013). 自閉症児におけるアイコンタクトと手の模倣行動の関係 第 24 回日本発達心理学会大会, 明治学院大学.
100. 野寄茉莉・藤澤啓子・安藤寿康・長谷川壽一 (2013). 双生児のきょうだい関係が社会的認知能力に与える影響 第 24 回日本発達心理学会大会, 明治学院大学.
101. 臼井さおり・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2013). 自閉症児と定型発達児における模倣対象の選択に関する検討 (2) 第 24 回日本発達心理学会大会, 明治学院大学.

◎平成 25 年度

102. Sanada, M., Ikeda, K., & Hasegawa, T. (2013). Spatial attention plays no functional role in color working memory maintenance: An ERP study. The 20th Annual Meeting of the Cognitive Neuroscience Society, Hyatt Regency Hotel, San Francisco, USA.
103. Ikeda, K. & Hasegawa, T. (2013). Dissociating Serial-Response and Parallel-Attention Costs in Task Switching. The 20th Annual Meeting of the Cognitive Neuroscience Society, Hyatt Regency Hotel, San Francisco, USA.
104. 大久保街亜 (2013). 企画・司会「閉じられた ANOVA とその先: 心理統計の現状と将来を考える」 日本基礎心理学会 2013 年度第 1 回フォーラム, 慶應義塾大学.
105. *32 Nagahata, M. [RA] & Ishikane, H. (2013). Attentional bias for body-related visual stimuli in eating disorder tendency. Vision Science Society 13th Annual Meeting, Naples, Florida, USA.
106. *34 岡田謙介 (2013). モデル選択のための統計法 日本基礎心理学会 2013 年度第 2 回フォーラム, 慶應義塾大学.
107. Akechi, H., Kikuchi, Y., Tojo, T., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2013). Cross-situational word - face learning in children with ASD. 12th International Meeting for Autism Research, Donostia San Sebastian, Spain.
108. Kikuchi, Y., Tojo, T., Osanai, H., & Hasegawa, T. (2013). Does eye contact enhance the accuracy of hand imitation in children with ASD?: An eye-tracking study. 12th International Meeting for Autism Research, Donostia San Sebastian, Spain.
109. *37 大久保街亜 (2013). 論文を書くための心理統計: 効果量・信頼区間・事前比較検定 日本認知心理学会第 11 回大会 認知心理学ベーシックセミナー2 講演, つくば国際会議場.
110. Nagahata, M. [RA] & Ishikane, H. (2013). EEG Alpha and beta power characteristics in high body dissatisfaction women. The 36th Annual Meeting of Japan Neuroscience Society, Kyoto International Conference Center.
111. Okamura, Y., Ehara, M., Nakajima, Y., Otsuka, E., Akaishi, M., & Yoshinaga, K. (2013). Comparison of the Behavior Rating

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

Inventory of Executive Function in English and Japanese. 2013 Mid-Year Meeting of International Neuropsychological Society, Amsterdam, The Netherlands.

112. Okada, K. (2013). A robust Bayesian approach to latent-class multidimensional scaling. The 78th annual and the 19th International Meeting of the Psychometric Society, Arnhem, the Netherlands.
113. Kiyonari, T., Inoue, Y., Tanida, S., Takahashi, H., & Hasegawa, T. (2013). Visual attention may affect accuracy of cheater detection. 25th Annual Human Behavior and Evolution Society Conference, Florida, USA.
114. Okubo, M., Ishikawa, K. [RA], & Kobayashi, A. (2013). A smile enhances male facial attractiveness for long-term relationships but not for short-term relationships. 9th International Conference on Cognitive Science, Kuching, Sarawak, Malaysia.
115. 石金浩史・猪股剛志・齊藤やちほ (2013). カエルの逃避行動を指標とした視覚情報符号化の解析 第 17 回視覚科学フォーラム, 立命館大学.
116. Okada, K. (2013). Bayesian evaluation of informative hypotheses in multidimensional scaling. 2013 Joint Statistical Meetings, Montreal, Canada.
117. 岡田謙介 (2013). クロンバックの α のメタ分析における情報仮説の評価 日本テスト学会第 11 回大会, 九州大学.
118. 岡田謙介 (2013). 心理統計学の導入教育で心がけていること (自主企画シンポジウム「文系学生に対する心理統計教育—統計的検定の基礎の教え方—」 日本教育心理学会第 55 回総会, 法政大学.
119. Ogawa, Y., Takei, Y., Koga, H., Shimada, M., Nagao, A., Sasaki, M., Kunisato, Y., Tanigawa, K., Suzuki, S. (2013). Characteristics of Cancer Outpatients who Hesitate to Speak with their Doctors During Medical Consultations. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference, Teikyo Heisei University.
120. Yada, S., Machida, Y., Son, S., Shimizu, K., Kunisato, Y., Kaneko, Y., Suyama, H., Shirai, M., Suzuki, S. (2013). The Relationship between Periods of Sick Leave and Automatic Thoughts among Employees with Depression. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference, Teikyo Heisei University.
121. 岡山紀子・宣 聖美・矢田さゆり・兼子 唯・巢山晴菜・清水 馨・国里愛彦・鈴木伸一 (2013). 関係性に焦点をあてた職場におけるコミュニケーション改善プログラムによる職位別のストレス低減効果の差異 第 13 回日本認知療法学会, 帝京平成大学.
122. 岡山紀子・宣 聖美・矢田さゆり・兼子 唯・巢山晴菜・清水 馨・国里愛彦・鈴木伸一 (2013). 集団メンバー間の関係性に焦点をあてた職場におけるコミュニケーション改善プログラムが職場のストレスに与える影響 日本行動療法学会第 39 回大会, 帝京平成大学.
123. 大久保街亜 (2013). 心理統計における新展開: 帰無仮説検定の先を見る YPS2013 特別講演, 日光ホテルファミテック.
124. 石川健太 [RA]・大久保街亜 (2013). 視線方向が社交不安傾向者の時間知覚に与える効果 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
125. 小林晃洋・大久保街亜 (2013). 制御焦点とワーキングメモリ容量の個人差 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
126. 鈴木 玄・大久保街亜 (2013). 非注意による見落としに及ぼす意味情報の影響 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
127. 鈴木敦命・石川健太 [RA]・小林晃洋・大久保街亜 (2013). 不正確だが共有されている顔の信頼性判断 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

128. 蔵屋鉄平・澤 幸祐 (2013). うつ病モデルマウスの活動性における周期性の変化 —強制水泳の実施回数が自発運動量に与える影響の時系列分析— 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
129. 宮下 遥・栗原 彬 [RA]・澤 幸祐 (2013). ラットにおける強制水泳試行数の違いが恐怖反応の再発に及ぼす影響 第 73 回日本動物心理学会大会, 筑波大学.
130. 栗原 彬 [RA]・澤 幸祐 (2013). 社会的学習によって得られた情報の保持間隔に関する検討: ラットの食物選択場面を用いて 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
131. 坂上千佳子・岡村陽子・山上精次 (2013). 大学生を対象にしたメンタルヘルスリテラシー尺度作成の試み 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
132. 廣田奈津子・吉田弘道・石田幸子・石津博子 (2013). 育児不安の高い母親への対応 —赤ちゃん講座の参加者について— 第 60 回日本小児保健協会学術集会, 国立オリンピック記念青少年総合センター.
133. 岡田謙介 (2013). ベイズ推定によるモデルベースト・クラスタリング 2013 年度 統計関連学会連合大会, 大阪大学.
134. 岡田謙介 (2013). 一般エスニシティ尺度についての情報仮説のメタ分析 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
135. 波田野結花・岡田謙介 (2013). 心理学の研究における効果量と p 値の乖離 日本心理学会第 77 回大会, 札幌コンベンションセンター.
136. 小関俊祐・小関真実・国里愛彦 (2013). 児童の抑うつに影響を及ぼす行動活性化の効果 日本心理学会第 77 回大会, 北海道医療大学.
137. 国里愛彦 (2013). シンポジウム「うつ病に対する認知行動療法の神経基盤」 日本心理学会第 77 回大会, 北海道医療大学.
138. 国里愛彦 (2013). チュートリアルワークショップ「自己報告式心理尺度の信頼性と妥当性における新しい国際基準」 日本心理学会第 77 回大会, 北海道医療大学.
139. 国里愛彦 (2013). シンポジウム「臨床研究に繋がるアナログ研究 —RDoC を意識した研究設計—」 日本心理学会第 77 回大会, 北海道医療大学.
140. 高田夏子 (2013). 九分割統合絵画法を用いた大学生の自閉症スペクトラムの研究(2) —SD 法による描画イメージの因子論的検討— 日本描画テスト・描画療法学会第 23 回大会, 奈良県新公会堂.
141. *38 大久保街亜 (2013). シンポジウム話題提供「効果量と信頼区間: p 値のみでは不十分」 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会, 江戸川大学.
142. Okubo, M., Ishikawa, K. [RA], & Kobayashi, A. (2013). Smile intensity and hemifacial asymmetry for perceived trustworthiness. 2013 Psychonomic Society Annual Meeting, Toronto, Ontario, Canada.
143. Kobayashi, A. & Okubo, M. (2013). Choking under Pressure: Regulatory Focus and Working Memory Capacity. 2013 Psychonomic Society Annual Meeting, Toronto, Ontario, Canada.
144. Ishikawa, K. [RA] & Okubo, M. (2013). The overestimation of stimulus durations in social anxiety. 21st Annual Meeting on Object Perception, Attention, and Memory, Toronto, Ontario, Canada.
145. 小澤拓大・下斗米淳 (2013). 過剰適応と実行されたサポートとの関連: 被援助志向性と心理的負債感からの検討 日本社会心理学会第 54 回大会, 沖縄国際大学.
146. 藤岡新治 (2013). 片口法によるスコアリングと解釈の基礎 日本ロールシャッハ学会第 17 回大会, 花園大学.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

147. Okada, K. (2013). Bayesian Evaluation of Compensation in Multidimensional Item Response Models. Ishigaki International Conference on Modern Statistics Theories, Practices, and Education in the 21st Century, ANA InterContinental Ishigaki.
148. 岡田謙介 (2013). 多次元項目反応理論モデルにおけるベイジアンモデルアベレージング 日本計算機統計学会第27回シンポジウム, 崇城大学.
149. 井上裕香子・清成透子・谷田林士・高橋英之・齋藤慈子・長谷川壽一 (2013). 目は口ほどにものを言う? 協力者と非協力者を見極める際の視線解析による探索的研究 日本社会心理学会第54回大会, 沖縄国際大学.
150. 国里愛彦 (2013). シンポジウム「うつ病と認知行動療法の作用機序に関する認知神経科学研究」 第29回日本ストレス学会学術総会, 徳島大学.
151. 鈴木玄・大久保街亜 (2013). 非注意による見落としに及ぼす意味情報の類似性の影響 日本基礎心理学会第32回大会, 金沢大学.
152. 榎本玲子・山上精次 (2013). 道具の使用方向が身体表象の変容に与える影響についての検討 日本基礎心理学会第32回大会, 金沢大学.
153. 石金浩史・猪股剛志・齋藤やちほ (2013). カエル逃避行動の誘発条件とニューロン活動 日本基礎心理学会第32回大会, 金沢大学.
154. 長畑 萌 [RA]・原澤賢充・石金浩史 (2013). 身体関連刺激の視覚探索における脳活動と体型不満との関係 日本基礎心理学会第32回大会, 金沢大学.
155. Okada, K. (2013). Objective and conventional priors in Bayesian evaluation of informative hypotheses. O-Bayes 2013, Duke University, NC, USA.
156. 井上裕香子・清成透子・谷田林士・高橋英之・齋藤慈子・長谷川壽一 (2014). 協力者・非協力者見極め時の注視部位の探索的分析 ~自閉症傾向を含めた検討~ 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第1回領域会議, 総合研究大学院大学.
157. 新井さくら・清成透子・齋藤慈子・長谷川壽一・山岸俊男 (2014). ヒトの生活史における資源分配戦略の個人差: 生活史理論、パーソナリティ特性、共感性との関連 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第1回領域会議, 総合研究大学院大学.
158. *39 大久保街亜 (2014). 再現可能性問題に対する諸関係領域の動向 日本社会心理学会春の方法論セミナー, 上智大学.
159. Sekiguchi, K. [PD], Ushitani, T., & Sawa, K. (2014). A limited use of multiple sets of spatial information by humans (Homo sapiens) in a computer screen-based goal-searching task. The 21th International Conference on Comparative Cognition, Melbourne, Florida, USA.
160. 中嶋夕湖・下斗米淳・岡本祐子 (2014). 社会的文脈における自尊感情の変動因に関する研究: 特性・状態自尊感情の関連メカニズムの理解 日本発達心理学会第25回大会, 京都大学.
161. Ishikane, H. (2014). Neural representation of visual information for escape behavior. The 91st Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, Kagoshima, Japan.
162. 岡田謙介 (2014). Stanによる新しいマルコフ連鎖モンテカルロ法 日本行動計量学会第16回春の合宿セミナー, 帝京大学.
163. *40 岡田謙介 (2014). 仮説検定における再現性の問題と新たな方法論 日本社会心理学会 春の方法論セミナー, 上智大学.
164. 明地洋典・菊池由葵子・東條吉邦・長内博雄・長谷川壽一 (2014). 自閉症児における通状況的学習 第25回日

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

本発達心理学会大会，京都大学.

165. 菊池由葵子・東條吉邦・長内博雄・長谷川寿一 (2014). 自閉症児におけるアイコンタクトと手の模倣行動の関係 (2) 第 25 回日本発達心理学会大会，京都大学.
166. 安田哲也・小林春美・東條吉邦・長内博雄・長谷川寿一 (2014). 教師者の視線方向と指さしの統合的利用における児童の語彙推測 第 25 回日本発達心理学会大会，京都大学.
167. 浅田晃佑・東條吉邦・長内博雄・長谷川寿一・熊谷晋一郎 (2014). 自閉症スペクトラム児におけるパーソナルスペースについて 第 25 回日本発達心理学会大会，京都大学.

◎平成 26 年度

168. 吉田弘道 (2014). ワークショップ「親面接の諸問題」日本心理臨床学会第 33 回春季大会，大分大学.
169. *43 Nagahata, M. [RA], Harasawa, M., & Ishikane, H. (2014). Relationship between cerebral blood flow and body dissatisfaction in visual search task involving body-related information. Vision Sciences Society 14th Annual Meeting, St. Pete Beach, Florida, USA.
170. 時田棕子・国里愛彦・松永美希 (2014). 抑うつと強化感受性・他者依存性との関連 日本認知・行動療法学会第 40 回大会，富山国際会議場.
171. 坂本次郎・国里愛彦・田中信利 (2014). 解釈バイアスと否定的・肯定的な将来予期の関連 日本認知・行動療法学会第 40 回大会，富山国際会議場.
172. 兼子 唯・巢山晴菜・国里愛彦・伊藤理紗・鈴木伸一 (2014). 日常生活内における安全確保行動がネガティブ感情に与える影響の検討 日本認知・行動療法学会第 40 回大会，富山国際会議場.
173. 柚取恵太・国里愛彦・村松 励 (2014). 自己愛パーソナリティの誇大特性と過敏特性が非行に与える影響 — 共感性との関連 — 日本認知・行動療法学会第 40 回大会，富山国際会議場.
174. 国里愛彦 (2014). 介入研究の質のアセスメント：GRADE システム（シンポジウム「失敗しない研究計画入門：研究の質を評価するための国際基準の理解」の話題提供） 日本認知・行動療法学会第 40 回大会，富山国際会議場.
175. Takahashi, Y. [PD], Sawa, K., & Okada, T. (2014). The Performance of novel location recognition task in rats is higher during nighttime than daytime. FENS forum 2014, Milano Congressi, Italy.
176. Sawa, K. & Kurihara, A. [RA] (2014). The role of temporal relationship among events in causal reasoning in rats. 日本動物心理学会第 74 回大会，京都大学霊長類研究所.
177. Okada, K. & Mayekawa, S. (2014). The hybrid item response model. The 79th Annual Meeting of the Psychometric Society, University of Wisconsin-Madison, USA.
178. 井上裕香子・清成透子・齋藤慈子・長谷川寿一 (2014). 他者の信頼性判断時における情報探索：視線計測による探索的検討 日本社会心理学会第 55 回大会，北海道大学.
179. 新井さくら・清成透子・齋藤慈子・長谷川寿一・山岸俊男 (2014). 生活史理論による個人差説明：生活史戦略尺度の妥当性の検討 日本社会心理学会第 55 回大会，北海道大学.
180. Osada, H. (2014). A qualitative analysis of narratives of Japanese mothers parenting children with developmental disabilities. Let's Talk About Children Annual Meeting 2014, Högsand, Finland.
181. Osada, H. (2014). Literacy about Autism Spectrum Disorder among Japanese general population. Let's Talk About Children Annual Meeting 2014, Högsand, Finland.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

182. 石金浩史・松崎みどり (2014). 網膜神経節細胞における拡大運動の情報表現 2014年度視覚科学フォーラム, 前橋工科大学.
183. Okada, K. & Mayekawa, S. (2014). Noncompensatory multiple logistic regression model and its application. The 21th International Conference on Computational Statistics, Geneva, Switzerland.
184. 岡田謙介・前川眞一 (2014). 補償型・非補償型を包含する多次元項目反応理論モデル 日本テスト学会第12回大会, 帝京大学.
185. 大久保街亜 (2014). フランダース利き手テスト日本語化の試み 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
186. 石川健太 [RA]・大久保街亜 (2014). 社交不安が感情価と明るさの比喩的関連づけに与える効果 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
187. 小林晃洋・大久保街亜 (2014). 特性不安の個人差と社会的プレッシャーの効果 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
188. 鈴木 玄・大久保街亜 (2014). 時間的知覚負荷が意味プライミングを変化させる: 注意の瞬きを用い検討 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
189. 蔵屋鉄平・澤 幸祐 (2014). うつ病モデルマウスの長期的な活動性変化の検討 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
190. 栗原 彬 [RA]・澤 幸祐 (2014). 条件性風味選好における渇水動因の役割 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
191. 小澤拓大・下斗米淳 (2014). 過剰適応傾向者の役割行動期待負担の検討 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
192. 鈴木彩夏・国里愛彦・下斗米淳 (2014). Dispositional Envy Scale および Episodic Envy Scale の日本語版作成と信頼性・妥当性の検討 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
193. 根岸美帆・村松 励 (2014). 家族機能と青年期の社会的スキルに関する一考察 日本心理臨床学会第33回秋季大会, パシフィコ横浜.
194. 村松 励 (2014). 「刑事司法において心理臨床家はどのような寄与ができるのか」指定討論 日本心理臨床学会第33回秋季大会, パシフィコ横浜.
195. 村松 励 (2014). 特別講演「新世代の認知行動療法を使いこなすために」指定討論 日本犯罪心理学会第52回大会, 早稲田大学.
196. 大岡駿介・榎本玲子・山上精次 (2014). 場面の特性が欺瞞性認知に与える影響 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
197. 石黒良和・榎本玲子・山上精次 (2014). 幼児における感情的役割取得と対人的問題解決が向社会性に及ぼす影響 日本心理学会第78回大会, 同志社大学.
198. 亀口憲治・高橋幸市・滝口俊子・馬場禮子・繁多 進・吉田弘道 (2014). シンポジウム「子ども・子育て新制度心理臨床家は何かができるか」(臨床心理士子育て支援合同委員会共催) 日本心理臨床学会第33回秋季大会, パシフィコ横浜.
199. *45 Ishikane, H., Inomata, T., Saito, Y., & Matsuzaki, M. (2014). Neural representation for looming stimuli in the retina. The 37th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Yokohama, Japan.
200. 岡田謙介 (2014). 調査小委員会企画シンポジウム「日本の心理学教育における教員数, カリキュラム, 授業数,

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

授業形態について」 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学.

201. 瀧本彩加・大西賢治・長谷川寿一 (2014). 向社会性を多角的な視点でとらえる ―遺伝子・神経ホルモン・神経システム・行動に着目して― 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学.
202. 池田功毅・古川みどり・長谷川寿一 (2014). 信頼行動情報による顔信頼性関連脳活動の修正 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学.
203. Kunisato, Y., Okamoto, Y., Yoshimura, S., Ueda, K., Matsunaga, M., Okada, G., Nishiyama, Y., Katsuragawa, T., Suzuki, S., & Yamawaki, S. (2014). The Volume of Right Superior Temporal Gyrus Mediated the Affect of Rumination to Treatment Response to CBT in Patients with Depression. The European Association for Behavioural and Cognitive Therapies, Hague, Netherlands.
204. 石井里穂・高田夏子 (2014). 星と波テストに投影されるものは何か ―描画特徴と気分・人格特性に関する基礎的検討― 日本箱庭療法学会第 28 回大会, 東洋英和女学院大学.
205. 藤岡新治・酒井玲子・古井由美子 (2014). 心理療法が有効であった血糖コントロールの悪い糖尿病患者の一事例 ―2 回のロールシャッハ・テストの比較から― (座長) 日本ロールシャッハ学会第 18 回大会, 佛教大学.
206. Okubo, M., Ishikawa, K. [RA], Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2014). The lateral posing bias in social exchange. Psychonomic Society's 55th Annual Meeting, Long Beach, California, USA.
207. Ishikawa, K. [RA], Suzuki, H., & Okubo, M. (2014). The effect of social anxiety on metaphorical association between facial expression and brightness. Object Perception, Attention, & Memory 2014, Long Beach, California, USA.
208. Kobayashi, A. & Okubo, M. (2014). Effect of pressure on working memory components. Object Perception, Attention, & Memory 2014, Long Beach, California, USA.
209. Suzuki, H. & Okubo, M. (2014). The effect of perceptual load on priming during attentional blink. Object Perception, Attention, & Memory 2014, Long Beach, California, USA.
210. Miyashita, H. [RA], Kurihara, A. [RA], & Sawa, K. (2014). Effects of trial numbers of forced swim procedure on conditioned fear renewal in rats. Psychonomic Society's 55th Annual Meeting, Long Beach, California, USA.
211. 下斗米淳 (2014). Coparenting の勢力基盤が子どもの愛着に及ぼす効果に関する発達の差異 日本教育心理学会第 56 回総会, 神戸国際会議場.
212. *46 Ishikane, H. & Matsuzaki, M. (2014). Expansion-selective ganglion cells in frog retina. The 44th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, Washington, D.C., USA.
213. 岡田謙介・前川眞一 (2014). 非補償型およびハイブリッド型のロジスティック回帰モデル 日本計算機統計学会第 28 回シンポジウム, 沖縄科学技術大学院大学.
214. Ikeda, K. & Hasegawa, T. (2014). Multi-Trial Switch Costs and a Mechanism of Ephemeral Task Control. The Psychonomic Society 55th Annual Meeting, Long Beach, California, USA.
215. 大西賢治・木村 泉・齋藤慈子・長谷川寿一 (2014). 評価型間接互惠性ルールの理解と利用が 5・6 歳齡児の仲間関係に与える影響 日本人間行動進化学会第 7 回大会, 神戸大学.
216. 井上裕香子・園部海里・清成透子・齋藤慈子・長谷川寿一 (2014). 他者の信頼性判断時における情報探索: 高信頼者は信頼性の低さを示唆する情報に注目するか? 日本人間行動進化学会第 7 回大会, 神戸大学.
217. 国里愛彦 (2014). シンポジウム「うつ病の認知行動科学研究の最前線とそれに基づく新たな臨床アプローチ」企画・座長 第 21 回日本行動医学会学術総会, 早稲田大学.
218. 小林晃洋・大久保街亜 (2014). ワーキングメモリ要素に対するプレッシャーの効果 日本基礎心理学会第 33 回

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

大会, 首都大学東京.

219. 鈴木 玄・大久保街亜 (2014). 非注意による見落としは意味の類似性で変化する 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
220. 加藤雅士・大久保街亜 (2014). 眼球運動による幻効果の検討 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
221. 蔵屋鉄平・小森政嗣・澤 幸祐 (2014). うつ病モデルマウスが示す活動性の周期的変化 日本基礎心理学会第 32 回大会, 金沢大学.
222. 林 大輔・大西まどか・山上精次 (2014). デジタル数字のクラウドニング効果と資格処理の階層性の関係 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
223. 榎本玲子・山上精次 (2014). 道具の使用方向と身体近傍空間の変容についての見当 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
224. 堀越歩・小林正法・真田原行・榎本玲子・山上精次 (2014). 幼児における虚記憶の発生メカニズムと自己制御機能の関係 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
225. 石金浩史・松崎みどり (2014). 初期視覚系における拡大感受性ニューロン 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
226. 佐藤 駿・中沢 仁 (2014). 視覚的得運動情報による時間知覚の変化 —先行刺激および対象の運動が及ぼす影響とその相互作用 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京.
227. Okada, K. & Mayekawa, S. (2014). Maximum likelihood estimation in a hybrid logistic model. The 7th International Conference of the ERCIM WG on Computational and Methodological Statistics, University of Pisa, Italy.
228. 北條大樹・八田大輝・小川泰史・岡田謙介 (2014). 野球のチームにおける投打の因子構造と因子得点を使ったクラスタリングの日米比較 第 4 回スポーツデータ解析コンペティション成果報告会, 立教大学.
229. 新井さくら・清成透子・齋藤慈子・長谷川寿一 (2015). 繁殖戦略としての男性のドミナンス: テストステロン指標との関連 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第 2 回領域会議, 東大寺総合文化センター.
230. 井上裕香子・園部海里・清成透子・齋藤慈子・長谷川寿一 (2015). 他者の信頼性判断時における情報探索: 高信頼者は信頼性の低さを示唆する情報に注目するか? 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第 2 回領域会議, 東大寺総合文化センター.
231. 浅田晃佑・東條吉邦・長内博雄・齋藤慈子・長谷川寿一・熊谷晋一郎 (2015). 自閉スペクトラム症者のボディイメージについて 第 26 回日本発達心理学会大会, 東京大学.
232. 菊池由葵子・東條吉邦・長内博雄・齋藤慈子・長谷川寿一 (2015). ASD 者におけるアイコンタクトによる心拍数の減少 第 26 回日本発達心理学会大会, 東京大学.
233. 兼子 唯・巢山晴菜・国里愛彦・伊藤理紗・鈴木伸一 (2015). 不安からの回避・逃避行動の分類の検討 第 7 回日本不安症学会学術大会, 広島アステールプラザ.
234. 国里愛彦・杣取恵太 (2015). 連合学習理論と不安症 (シンポジウム「不安障害の心理学基礎研究と認知行動療法」) 第 7 回日本不安症学会学術大会, 広島アステールプラザ.
235. 岡田謙介 (2015). 行動計量学のためのベイズ推定におけるモデル選択・評価 日本行動計量学会 第 15 回春の合宿セミナー, 東京大学.
236. *50 岡田謙介 (2015). 心理学における効果量をめぐる最近の動向 日本発達心理学会 第 26 回大会 チュートリアルセミナー, 東京大学.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

◎平成 27 年度

237. 大久保街亜・石川健太 [RA]・小林晃洋 (2015). 笑顔の男性は魅力的か? 日本電子通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2015 年 5 月研究会, 沖縄産業支援センター.
238. Nagahata, M. [RA], Onoda, M., Mito, E., Harasawa, M., & Ishikane, H. (2015). Relationships between eating disorder tendency and body imaged-related size perception. Vision Sciences Society 15th Annual Meeting, St. Pete Beach, Florida, USA.
239. Matsuzaki, M., & Ishikane, H. (2015). Retinal representation of escape-related visual information. Vision Sciences Society 15th Annual Meeting, St. Pete Beach, Florida, USA.
240. *57 Sakamoto, J., Somatori, K., Okubo, M., & Kunisato, Y. (2015). Depression and Intertemporal Choice of Pain: Maximum Likelihood Estimation vs. Hierarchical Bayesian Analysis. 48th annual meeting of the society mathematical psychology, Newport beach, California, USA.
241. Tanaka, T., Kunisato, Y., Okubo, M., & Okada, K. (2015). Why people frequently commit the base-rate fallacy. 48th annual meeting of the society mathematical psychology, Newport beach, California, USA.
242. Somatori, K., Sakamoto, J., Shimotomai, A., & Kunisato, Y. (2015). What is a true measure for meta-cognition? : A Bayesian cognitive modeling approach. 48th annual meeting of the society mathematical psychology, Newport beach, California, USA.
243. 村松 励 (2015). 自主シンポジウム「刑事裁判における家族臨床の意義と可能性」指定討論 日本家族研究・家族療法学会第 32 回大会, 山形大学.
244. 村松 励 (2015). 研修事例スーパービジョン司会 日本家族研究・家族療法学会第 32 回大会, 山形大学.
245. 吉田弘道 (2015). 「地域における子育て支援 —臨床心理士の新たな役割—」指定討論 第 11 回子育て支援講座, 京都.
246. *56 Okada, K. & Mayekawa, S. (2015). Bayesian estimation in hybrid multidimensional item response model. The 79th annual and the 20th International Meeting of the Psychometric Society, Beijing Normal University.
247. *56 Okada, K. & Lee, M. D. (2015). Bayesian K-INDSCAL for modeling both group characteristics and individual differences in similarity data. The 48th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology, Newport Beach, CA, USA.
248. 高垣耕企・岡本泰昌・神人 蘭・森 麻子・西山佳子・山村崇尚・横山仁史・塩田翔一・岡本百合・三宅典恵・尾形明子・国里愛彦・川上憲人・古川壽亮・山脇成人 (2015). 青年期閾値下うつを対象とした短期行動活性化の効果: 無作為化比較試験 第 12 回日本うつ病学会総会, 京王プラザホテル.
249. Osada, H., Yamamoto, S., Shoji, Y., & Ueno, R. (2015). Development of the Infantile Interview Guide for Early Detection of Neurodevelopmental Disorders. The 12th International Family Nursing Conference, Odense, Denmark.
250. Okubo, M., Ishikawa, K. [RA], Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2015). Lateral posing bias for displaying trustworthiness. 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Cebu City, Philippines.
251. Harasawa, M., Nagahata, M. [RA], & Ishikane, H. (2015). Expecting higher attentional load affected orienting 'what' and 'where' visual attention: a bimodal brain imaging study with fNIRS and EEG. ECV2015, Liverpool, England.
252. 石金浩史・松崎みどり・矢吹美帆・中沢 仁 (2015). 運動刺激の長時間呈示がマウス視覚誘発性行に及ぼす影響 2015 年度視覚科学フォーラム, ホテル福島グリーンパレス.
253. 川島桐吾・谷原明子・瀧澤伸剛・大下陽介・坪 泰宏・北野勝則・天野 晃・石金浩史・小池千恵子 (2015). 網膜 ON 型機能欠損マウスの神経回路および投射経路解析 2015 年度視覚科学フォーラム, ホテル福島グリーンパレ

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

ス.

254. *56 Okada, K. & Mayekawa, S. (2015). Post-processing of MCMC output in Bayesian multidimensional scaling. 2015 Joint Statistical Meetings, Seattle, WA, USA.
255. 石川健太 [RA]・大久保街亜 (2015). 社交不安が他者の視線方向の変化に与える効果 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
256. 鈴木 玄・大久保街亜 (2015). 視線変化による注意捕捉は男女で異なる 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
257. Okubo, M. (2015). Race illusion: A pupillometry study. illusions - present and future. Open international seminar on perceptual Illusions, University of Oslo, Oslo, Norway.
258. 大久保街亜 (2015). 公募シンポジウム「HMC 法によるベイズ統計学の導入と実験データの分析 : t 検定・分散分析からの卒業」指定討論 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
259. 澤 幸祐 (2015). 学会企画シンポジウム「学会での初めての英語オーラル発表」 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
260. 澤 幸祐 (2015). シンポジウム「異種間で伝達される社会的シグナルの探求 一種を超えて結ばれる絆の形成メカニズムの解明に向けて」企画 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
261. 石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡 新治 (2015). 援助要請と生活適応感の関連性 ー他者軽視と自尊感情の観点からー 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
262. 大岡駿介・榎本玲子・山上精次・村松 励 (2015). 自己制御資源の消耗が欺瞞行動に及ぼす影響 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
263. 堀越 歩・榎本玲子・山上精次・吉田弘道 (2015). キーボードタッピングが侵入記憶に及ぼす影響 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
264. 吉田弘道 (2015). 大会委員会企画シンポジウム「大災害を経験した子育て支援システムー破壊・再建・発展ー」企画 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
265. 吉田弘道 (2015). 研究発表「問題行動の無い施設入所児童にプレイセラピーを導入することについて」指定討論 日本遊戯療法学会第 21 回大会, 神戸女学院大学.
266. 長畑萌 [RA]・佐藤 駿・中沢 仁・原澤賢充・石金浩史 (2015). 摂食障害傾向は身体画像の大きさ知覚に影響する 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
267. 松崎みどり・矢吹美帆・中沢 仁・石金浩史 (2015). 運動刺激順応後に観察される視運動反応の変化 日本神経回路学会第 25 回全国大会, 電気通信大学.
268. 国里愛彦 (2015). 論文作成における尺度開発の方法と実際 (機関誌編集委員会企画シンポジウム) 日本健康心理学会第 28 回大会, 桜美林大学.
269. 国里愛彦 (2015). 介入効果のメタ分析 (公募シンポジウム「現場に役立つ心理学(5): 研究・実践の効果を測定するための研究デザインとデータ分析」) 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
270. 国里愛彦 (2015). うつ病の反すうに関する脳画像研究 (公募シンポジウム「反すう研究の最前線: 国内で行われた研究を中心に」) 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.
271. 吉村普平・岡本泰昌・松永美希・国里愛彦・小野田慶一・鈴木伸一・山脇成人 (2015). うつ病に対する認知行動療法における内側前頭前野: 前帯状回間の機能的結合性の変化について 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

272. 坂本次郎・大久保街亜・国里愛彦 (2015). 抑うつにおける痛みの将来予測と意思決定：計算論アプローチによる意思決定過程の検討 日本認知・行動療法学会第 41 回大会, 仙台国際センター.
273. 小田島裕佳・佐々木彩・国里愛彦・熊野宏昭 (2015). 意バイアス修正課題の教示内容が社交不安と背外側前頭前野の総ヘモグロビン濃度に及ぼす影響：近赤外線分光法を用いた検討 日本認知・行動療法学会第 41 回大会, 仙台国際センター.
274. 柚取恵太・下斗米淳・国里愛彦 (2015). 新たなメタ認知課題の作成と妥当性の検討 日本認知・行動療法学会第 41 回大会, 仙台国際センター.
275. 時田椋子・坂本次郎・柚取恵太・澤 幸祐・国里愛彦 (2015). 経験サンプリングにおける喫煙に渴望が与える影響：系統的レビューとメタアナリシス 日本認知・行動療法学会第 41 回大会, 仙台国際センター.
276. Okubo, M., Ishikawa, K. [PD], Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2015). Cheaters Used the Left Hemiface to Increase Facial Trustworthiness. Psychonomic Society's 56th Annual Meeting, Chicago, USA.
277. Ishikawa, K. [PD], Suzuki, H., & Okubo, M. (2015). Gender differences for emotional expressions in social anxiety. Psychonomic Society's 56th Annual Meeting, Chicago, USA.
278. 鈴木 玄・山上精次・大久保街亜 (2015). 男と女で視線検出は違う 日本基礎心理学会第 34 回大会, 大阪樟蔭女子大学.
279. 下斗米淳・風間文明・角尾美奈・飛田 操 (2015). 世間からの影響過程における自己機能の研究 1：自己機能の検討 日本社会心理学会第 56 回大会, 東京女子大学.
280. 角尾美奈・下斗米淳・風間文明・飛田 操 (2015). 世間からの影響過程における自己機能の研究 2：警告反応としての社会的不安の検討 日本社会心理学会第 56 回大会, 東京女子大学.
281. 藤岡新治・荒井 淳・木下直紀・塚原さち子・岩倉 拓 (2015). 統合失調症前駆期のロールシャッハ上の特徴（その 2）—顕在発症後に施工した再検査結果との比較から—（座長） 日本ロールシャッハ学会第 19 回大会, 立正大学.
282. 岡村陽子 (2015). 高次脳機能障害者の心理的適応に認知リハへの参加が与える影響 第 39 回日本高次脳機能障害学会学術総会, ベルサール渋谷ファースト.
283. 松井健太・安保博史・渥美美奈子・浦 雄司・小磯さおり・濱口陽介・数野理恵・平野 栄・白野 明・岡村陽子 (2015). 生活行動スキルを重視した高次脳機能障害グループプログラム —当事者、家族の QOL 変化から—考察 — 第 39 回日本高次脳機能障害学会学術総会, ベルサール渋谷ファースト.

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

I. シンポジウム・学会

※以下、人名後ろの括弧内は開催当時の所属・役職を示す。

【平成 23 年度】

◆第 1 回シンポジウム (別紙 1)

テーマ：心と体と環境をつなぐ科学

日 時：平成 23 年 11 月 27 日 (日) 14:00 ~ 16:30

場 所：専修大学神田校舎 7 号館 3 階 731 教室

内 容：

《 趣旨説明 》

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

《 講 演 》

「バーチャルリアリティからリアリティを考える」

北崎 充晃 (豊橋技術科学大学大学院 准教授)

「ブレインライフログ：身体運動時脳波による環境センシングの試み」

唐山 英明 (富山県立大学 准教授)

「脳活動情報から心を読む」

繁樹 博昭 (高知工科大学 准教授)

《 パネルディスカッション 》

[パネリスト]

佐藤 隆夫 (日本心理学会理事長/日本基礎心理学会理事長/東京大学大学院 教授)

池田 まさみ (十文字学園女子大学 准教授)

原澤 賢充 (NHK 放送技術研究所)

[司会・進行]

北崎 充晃 (豊橋技術科学大学大学院 准教授)

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/専修大学 准教授)

◆第 2 回シンポジウム (別紙 2) *2

テーマ：「心理学における効果の大きさとばらつき」

日 時：平成 24 年 2 月 25 日 (土) 13:00 ~ 17:45

場 所：専修大学生田校舎 10 号館 1 階 10103 教室

内 容：

《 上 映 》

「The PHD Movie」

《 研究報告 》

「心理学における統計改革 (1)」

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/専修大学 准教授)

「心理学における統計改革 (2)」

岡田 謙介 (心理科学研究センター研究員/専修大学 講師)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

《 講 演 》

「実験心理学者にとっての効果量」

井関 龍太 (日本学術振興会特別研究員 (PD)・京都大学)

「行動遺伝学からみた効果量 ―遺伝子と環境はどのように個性を生み出すか―」

山形 伸二 (独立行政法人 大学入試センター 特任助教)

「検定力分析と標準化効果量を超えて ―正確度分析と非標準化効果量―」

奥村 泰之 (独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 外来研究員)

【平成 24 年度】

◆第 3 回シンポジウム (別紙 3) *17

テーマ：「不安, うつ, 妄想に挑む心理学：臨床と基礎の融合を目指して」

日 時：平成 24 年 6 月 16 日 (土) 13:30 ~ 17:10

場 所：専修大学生田校舎 10 号館 1 階 10101 教室

内 容：

《 研究報告 》

「臨床と基礎：実験心理学からのアプローチ」

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/専修大学 准教授)

《 講 演 》

「社交不安障害の認知行動療法に活かす基礎研究」

金井 嘉宏 (東北学院大学 准教授)

「うつ病と意思決定：計算論的臨床心理学からみたうつ病」

国里 愛彦 (早稲田大学 助手)

「妄想・幻覚と自他の表象：基礎から臨床へ、臨床から基礎へ」

浅井 智久 (千葉大学/日本学術振興会特別研究員 SPD)

《 指定討論 》

長田 洋和 (心理科学研究センター代表/専修大学教授)

◆日本心理学会第 76 回大会

日 時：平成 24 年 9 月 11 日 (火) ~ 13 日 (木)

場 所：専修大学生田校舎

内 容：

《 シンポジウム (心理科学研究センター共催) 》

「動物実験研究の意義と将来 ―基礎から応用、隣接領域まで―」 *22

企画者：澤 幸祐 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授) 他

「東日本大震災における支援専門職者への心理支援」 *23

企画者：乾 吉佑 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授) 他

「健康行動促進をめざしたリスク認知とヘルスコミュニケーション」 *24

企画者：下斗米 淳 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授) 他

「日本の EAP の現状と今後の課題」 *25

企画者：藤岡 新治 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

「少年非行と発達障害」*26

企画者：長田 洋和 (心理科学研究センター代表/専修大学教授)
村松 励 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授) 他

◆第4回シンポジウム(別紙4) ※国際シンポジウム*14

テーマ：「Expansion of associative learning theory」

日時：平成24年11月10日(土) 14:00～17:00

場所：専修大学神田校舎7号館3階 731教室

内容：

《研究報告》

「Introduction; associative basis of cognition in animals and humans」

澤 幸祐 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

《講演》

「Measuring changes in associative learning」

Robert A. Rescorla (ペンシルバニア大学名誉教授)

「Information variables in Pavlovian conditioning preparations; One more piece of evidence」

中島 定彦 (関西学院大学教授)

「Neural basis of conditioning and reinforcement learning: A mechanistic perspective on learning and decision」

鮫島 和行 (玉川大学准教授)

【平成25年度】

◆第5回シンポジウム(別紙5) ※国際シンポジウム*28

テーマ：「Development and current situations of Cognitive Behavioural Therapy
for children and/or persons with disabilities
—障がい児・者への認知行動療法 基礎研究から応用実践へ その発展と今—」

日時：平成25年8月31日(土) 13:30～17:15

場所：専修大学神田校舎7号館731教室

内容：

《趣旨説明》

長田 洋和 (心理科学研究センター代表/専修大学教授)

《基調講演》

「SYNAPSE's efforts and achievements for children and persons with disabilities」

Jennifer Cullen

(CEO of SYNAPSE Inc / Associate Fellow of Australian College of Health Service Management)

《研究報告》

「A practice of neuropsychological rehabilitation for the elderly with acquired brain injury」

岡村 陽子 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

「Neural mechanisms of Cognitive Behavioral Therapy for depression」

国里 愛彦 (心理科学研究センター研究員/専修大学講師)

「Literacy of developmental disorders in Japanese general population」

長田 洋和 (心理科学研究センター代表/専修大学教授)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

◆第6回シンポジウム (別紙6) *33

テーマ : 「生理心理学のフロンティア」

日時 : 平成25年11月10日(日) 14:00 ~ 17:15

場所 : 専修大学神田校舎7号館731教室

内容 :

《趣旨説明》

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

《基調講演》

「網膜における視覚情報処理 -受容野概念をめぐって-」

立花 政夫 (東京大学大学院教授)

《講演》

「記憶の日内変動を司る生理心理学的基礎を求めて」

岡田 隆 (上智大学教授)

「抗うつ作用の基盤としての海馬神経脱成熟」

小林 克典 (日本医科大学准教授)

《研究報告》

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

【平成26年度】

◆第7回シンポジウム (別紙7) *51

テーマ : Big Data in Psychological Science and Related Disciplines
-心理学と関連諸領域におけるビッグデータ-

日時 : 平成26年9月6日(土) 13:15 ~ 17:50

場所 : 専修大学神田校舎7号館731教室

内容 :

《趣旨説明》

岡田 謙介 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

《研究報告》

「Bayesian approach for the mechanism of hippocampal synaptic plasticity」

高橋 良幸 (心理科学研究センター ポスト・ドクター)

「The periodicity of depression in animal models

- Time series analysis for long-term activity of model animals -」

蔵屋 鉄平 (専修大学大学院文学研究科博士後期課程)

澤 幸祐 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授)

「Bayesian evaluation of informative hypotheses in meta analysis」

岡田 謙介 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

《講演》

「Prediction of personal attributes from digital records」

Michal Kosinski (スタンフォード大学 リサーチフェロー)

「Changing a large-scale test using computer-based testing」

大久保 智哉 (独立行政法人 大学入試センター 研究開発部 助教)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

「Insights from a nationwide children's study」

竹内 文乃 (独立行政法人 国立環境研究所 環境健康研究センター 研究員)

◆**第8回シンポジウム (別紙8) *52**

テーマ : 「Face and communication: Cognitive basis and its evolution
ー顔とコミュニケーション: 認知の基盤とその進化を探るー」

日時 : 平成26年11月8日(土) 13:00 ~ 17:00

場所 : 専修大学神田校舎7号館731教室

内容 :

《趣旨説明》

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授)

《研究報告》

「Which side do you choose? Facial asymmetry in trustworthiness

ーどちらを選ぶ? 信頼感における顔の左右差ー」

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授)

《基調講演》

「The self-visible face ー顔に自ずと表れるー」

Mark Changizi (2AI Labs 共同代表)

《講演》

「The self-loving face ー自分に似た顔を好む: パートナー選択と顔の好みー」

Bruno Laeng (オスロ大学 教授)

「The self-sacrificing face ー利他性と顔ー」

小田 亮 (名古屋工業大学 准教授)

《質疑応答・フリーディスカッション》

【平成27年度】

◆**第9回シンポジウム (別紙9) *58**

テーマ : 「融合的心理科学の創成: 心の連続性を探る」

日時 : 平成27年10月24日(土) 11:00 ~ 16:40

場所 : 専修大学神田校舎7号館731教室

内容 :

《趣旨説明》

長田 洋和 (心理科学研究センター研究代表/専修大学教授)

《心理科学研究センター研究報告》

「笑顔の男性は魅力的か?」

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授)

「因果推論を通じて連合学習とベイズ推論を考える」

澤 幸祐 (心理科学研究センター研究員/専修大学教授)

「視覚ニューロンによる情報表現」

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

「複雑な臨床的問題を階層ベイズで解く」

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

国里 愛彦 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

坂本 次郎 (専修大学大学院文学研究科修士課程)

杣取 恵太 (専修大学大学院文学研究科修士課程)

「疫学は融合的心理科学と呼び得るか？」

長田 洋和 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

《 招待講演 》

「Imaginary light: Pupil responses to nonexistent stimuli

—まぼろしの光：実在しない刺激に対する瞳孔反応—

Bruno Laeng (オスロ大学 教授)

《 パネルディスカッション 》

「融合的心理科学の創成は成し得たか？」

指 定 討 論：長谷川 寿一 (心理科学研究センター客員研究員/東京大学大学院 教授)

モデレーター：澤 幸 祐 (心理科学研究センター研究員/専修大学 教授)

パネ リ ス ト：心理科学研究センター研究員

II. 刊行物

【平成 23 年度】

「心理科学研究センター年報」第 1 号 *5

平成 24 年 3 月・全 178 頁 (別紙 10)

【平成 24 年度】

「心理科学研究センター年報」第 2 号

平成 25 年 3 月・全 290 頁 (別紙 11)

【平成 25 年度】

「心理科学研究センター年報」第 3 号

平成 26 年 3 月・全 184 頁 (別紙 12)

【平成 26 年度】

「心理科学研究センター年報」第 4 号

平成 27 年 3 月・全 234 頁 (別紙 13)

【平成 27 年度】

「心理科学研究センター年報」第 5 号

平成 28 年 3 月・全 187 頁 (別紙 14)

III. インターネットでの公開

◆心理科学研究センターホームページ

<http://www.senshu-u.ac.jp/cps/index.html>

(シンポジウム情報とその講演動画・写真の公開、および各研究成果を随時更新・公開)

◆専修大学学術機関リポジトリサイト SI-Box <http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/>

(刊行した年報を PDF ファイル形式で掲載し、広く公開)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

14 その他の研究成果等

【 研究会 】

※以下、人名後ろの括弧内は開催当時の所属・役職を示す。

◆第1回 研究会

テーマ : 「連合学習研究と高次認知研究の接点」

日時 : 平成 24 年 11 月 11 日 (日) 9:00 ~ 18:00

場所 : 専修大学生田校舎 11 号館 2 階 談話室

内容 :

《 講演 》

「連合学習研究の技法と理論について」

Robert A. Rescorla (ペンシルバニア大学名誉教授)

《 討論 》

「連合学習研究と高次認知研究の接点」

Robert A. Rescorla (ペンシルバニア大学名誉教授)

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/人間科学部准教授)

澤 幸 祐 (心理科学研究センター研究員/人間科学部准教授)

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/人間科学部准教授)

《 施設見学 》

専修大学生田校舎 4 号館の心理学実験施設・設備の見学および Rescorla 氏よりコメント。

◆第2回 研究会

テーマ : 「視覚研究における進化的検討の意義」

日時 : 平成 26 年 11 月 10 日 (日) 13:00 ~ 18:00

場所 : 専修大学生田校舎 4 号館ゼミ 44A 教室 (その他心理学実験室)

内容 :

《 講演 》

「理論生物学における視覚研究の展開」

Mark Changizi (2AI Labs 共同代表)

《 研究発表・討論 》

[研究発表]

石川 健太 (心理科学研究センター リサーチ・アシスタント)

小林 晃洋 (専修大学大学院文学研究科博士後期課程)

[研究討論]

Mark Changizi (2AI Labs 共同代表)

大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/人間科学部教授)

澤 幸 祐 (心理科学研究センター研究員/人間科学部教授)

石金 浩史 (心理科学研究センター研究員/人間科学部准教授)

岡田 謙介 (心理科学研究センター研究員/人間科学部准教授)

《 施設見学 》

専修大学生田校舎 4 号館の心理学実験施設・設備の見学および Changizi 氏よりコメント。

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

◆第3回 研究会

テーマ：「ベイズ推定の心理学データへの適用」

日時：平成28年3月8日(火) 10:00～17:00

場所：専修大学生田校舎4号館ゼミ44A教室 (その他心理学実験室)

内容：

《講演》

「神経科学におけるベイズ推定」

鮫島 和行 (玉川大学脳科学研究所 准教授)

「動物のデータとヒトのデータ」

牛谷 智一 (千葉大学文学部 准教授)

「データに基づく臨床心理学」

小関 俊祐 (桜美林大学心理・教育学系 講師)

《実験室見学》

《ラウンドテーブルディスカッション》

《研究発表・討論》

[研究発表者]

高橋 良幸 (心理科学研究センター ポスト・ドクター)

坂本 次郎 (専修大学大学院文学研究科修士課程)

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

「多様なバックグラウンドを有するメンバーの研究成果の集約に留意されたい。」

<「選定時」に付された留意事項への対応>

心理科学の諸領域の融合を目指すにあたり、プロジェクトにおける全体的な方針として、研究の計画段階から異なるバックグラウンドを持つメンバーがプロジェクトに協同で参画するように心がけた。例えば、ベイズ統計学に基づく新たな心理統計手法の提案にあたっては、心理統計学を専門とするメンバーと実験心理学を専門とするメンバーが参画し、実験心理学者が考える研究の実践における問題点と心理統計学者が考える理論的な問題点のする合わせを行った。その成果として刊行された「伝えるための心理統計:効果量,信頼区間,検定力(勁草書房)」は学会出版賞を受賞するなど、研究者諸氏に好評を得た。また、この書籍の成果をもとに行ったシンポジウムも多くの来場者を集めた。さらに、この書籍の刊行をきっかけに我々が提案した解析手法およびその発展について、日本教育心理学会、日本基礎心理学会、日本認知心理学会、日本パーソナリティ心理学会などさまざまな領域にまたがる心理学関連諸学会からシンポジウムやフォーラムの開催依頼が届き、依頼に応えずでいくつかを開催した。これはこの我々の成果が、心理学の諸領域の融合に役立つものであることを強く示唆する。このような成果が得られたことが、異なるバックグラウンドを持つ研究者がプロジェクトに対して有機的に参画した結果であると考えられる。

心理統計手法の提案だけでなく、臨床心理学と基礎心理学の融合、臨床心理学的問題における疫学的アプローチの使用などさまざまなプロジェクトにおいて、メンバーは研究計画段階から協同で参画している。例えば、長田研究代表を中心とする臨床心理学の研究者と心理統計を専門とする岡田研究員が協同し、自閉症スペクトラムの生涯発達に関して研究を行った。この研究では、児童期に自閉症スペクトラムと診断された児童が各ライフステージにどのような発達過程を遂げていくかを、自閉症スペクトラムの発達過程理論に基づき、ベイズ推定を利用した共分散構造分析を用いて検証した。また、澤研究員が学習理論の立場から検討した不安のモデルを提案し、その概要について認知行動療法学会のシンポジウムで講演を行った。ほかにも、社交不安という臨床的なテーマを実験心理学の手法によって検討した研究についての論文が、日本心理学会発行の「心理学研究」に掲載されるなど、着実な成果が上がっている。これらの成果は、平成 24 年度のシンポジウム「不安,うつ,妄想に挑む心理学:臨床と基礎の融合を目指して」を行うことにより、研究者だけでなく広く一般の方々にも紹介した。また、ベイズ統計学を柱に、臨床心理学的なトピックについて検討を進めるなど臨床と基礎の融合は、新たなかたちで進んだ。その成果をわれわれは平成 27 年の 7 月に開催される米国の数理心理学会で発表した。

これらの点を留意してプロジェクトを進行させた結果、中間評価において、2 名の評価者から A 評価(着実な進捗が見られる)をいただいた。これは、選定時に付された留意事項について、本プロジェクトが適切に対応してきたことを裏付けるものと考えられる。

<「中間評価時」に付された留意事項>

該当なし

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

該当なし

法人番号	131039
プロジェクト番号	S1101013

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成23年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	8,834	2,945	5,889	0	0	0	
	研究費	26,638	15,648	10,990	0	0	0	
平成24年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	25,048	17,068	7,980	0	0	0	
平成25年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	24,643	17,303	7,340	0	0	0	
平成26年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	24,608	17,818	6,790	0	0	0	
平成27年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	24,814	17,944	6,870	0	0	0	
総額	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	8,834	2,945	5,889	0	0	0	
	研究費	125,751	85,781	39,970	0	0	0	
総計	134,585	88,726	45,859	0	0	0		

法人番号

131039

17 施設・装置・設備の整備状況（私学助成を受けたものはすべて記載してください。）
 《施設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）（千円）

施設名称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
社会知性開発研究センター		121m ²	1	17			
心理学実験室		1,100m ²	15	17			
心理教育相談室		238m ²	14	7			

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

m²

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）（千円）

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
マルチパッチクランプ電気生理実験装置	平成23	multiclamp 700B-IS	1	週20	8,834	5,889	私学助成
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況（千円）

年度	平成	23	年度	積算内訳	
小科目	支出額		主な用途	金額	主な内容
教育研究経費支出					
消耗品費	5,445		コピー代、実験用品等	5,445	コピー、参考資料、消耗品、実験用品/動物 他
光熱水費	0			0	
通信運搬費	22		郵送料等	22	資料・年報送付、行事案内 他
印刷製本費	1,228		印刷費等	1,228	行事案内、年報、封筒 他
旅費交通費	1,269		国内・海外出張等	1,269	国内・海外出張旅費 他
報酬・委託料	99		委託・謝礼費等	99	シンポジウム講師謝礼、テープ起こし委託 他
準備品費	5,996		パソコン等	5,996	パソコン、実験機器 他
その他	79		雑費等	79	行事開催時雑費、動画使用料
計	14,138			14,138	
アルバイト関係支出					
人件費支出	1,367			1,367	時給:1,100円 年間時間数:1,243時間
(兼務職員)	1,672			1,672	実人数:1名
教育研究経費支出	0			0	
計	3,039			3,039	
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品	6,795		実験機器	6,795	顕微鏡用視覚刺激呈示装置 他
図書	0			0	
計	6,795			6,795	
研究スタッフ関係支出					
リサーチ・アシスタント	1,333			1,333	学内1名
ポスト・ドクター	1,333			1,333	学内1名
研究支援推進経費	0			0	
計	2,666			2,666	

法人番号	131039
------	--------

年 度	平成 24 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	3,517	コピー代、実験用品等	3,517
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	220	郵送料等	220
印 刷 製 本 費	1,362	印刷費等	1,362
旅 費 交 通 費	1,654	国内・海外出張等	1,654
報 酬・委 託 料	840	委託・謝礼費等	840
準 備 品 費	941	パソコン等	941
そ の 他	424	諸会費、雑費等	424
計	8,958		8,958
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出	1,201		1,201
(兼務職員)	2,901		2,901
教育研究経費支出	0		0
計	4,102		4,102
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	4,322	実験機器	4,322
図 書	0		0
計	4,322		4,322
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	5,666		5,666
ポスト・ドクター	2,000		2,000
研究支援推進経費	0		0
計	7,666		7,666

年 度	平成 25 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	3,691	コピー代、実験用品等	3,691
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	221	郵送料等	221
印 刷 製 本 費	1,390	印刷費等	1,390
旅 費 交 通 費	1,841	国内・海外出張等	1,841
報 酬・委 託 料	1,097	委託・謝礼費等	1,097
準 備 品 費	669	パソコン等	669
そ の 他	136	諸会費、雑費等	136
計	9,045		9,045
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出	1,613		1,613
(兼務職員)	2,678		2,678
教育研究経費支出	0		0
計	4,291		4,291
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	3,307	実験機器	3,307
図 書	0		0
計	3,307		3,307
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	6,000		6,000
ポスト・ドクター	2,000		2,000
研究支援推進経費	0		0
計	8,000		8,000

年 度	平成 26 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	2,106	コピー代、実験用品等	2,106
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	198	郵送料等	198
印 刷 製 本 費	1,316	印刷費等	1,316
旅 費 交 通 費	2,908	国内・海外出張等	2,908
報 酬・委 託 料	1,572	委託・謝礼費等	1,572
準 備 品 費	0		0
そ の 他	206	諸会費、雑費等	206
計	8,306		8,306
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出	2,898		2,898
(兼務職員)	3,404		3,404
教育研究経費支出	0		0
計	6,302		6,302
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	0		0
図 書	0		0
計	0		0
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	8,000		8,000
ポスト・ドクター	2,000		2,000
研究支援推進経費	0		0
計	10,000		10,000

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	2,432	コピー代、実験用品等	2,432
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	176	郵送料等	176
印 刷 製 本 費	1,068	印刷費等	1,068
旅 費 交 通 費	2,612	国内・海外出張等	2,612
報 酬・委 託 料	2,373	委託・謝礼費等	2,373
準 備 品 費	0	パソコン等	0
そ の 他	351	諸会費、雑費等	351
計	9,012		9,012
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出	2,310		2,310
(兼務職員)	3,492		3,492
教育研究経費支出	0		0
計	5,802		5,802
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	0		0
図 書	0		0
計	0		0
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	6,945		6,945
ポスト・ドクター	3,055		3,055
研究支援推進経費	0		0
計	10,000		10,000

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 平成23年度選定事業
 融合的心理学の創成：心の連続性を探る

心理科学研究センター 平成23年度 シンポジウム

テーマ

心と体と環境をつなぐ科学

日時：平成23年11月27日(日) 14:00~16:30(受付13:30~)
 場所：専修大学神田校舎 7号館3階 731教室
 定員：150名(先着順)

【趣旨説明】 14:00~14:05

石金浩史(心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

【講演】 14:05~14:35

北崎充晃(豊橋技術科学大学大学院准教授)

「バーチャルリアリティからリアリティを考える」

14:35~15:05

唐山英明(富山県立大学准教授)

「ブレインライフログ：身体運動時脳波による環境センシングの試み」

15:20~15:50

繁樹博昭(高知工科大学准教授)

「脳活動情報から心を読む」

【パネルディスカッション】

15:50~16:30

パネリスト：佐藤隆夫(日本心理学会理事長/日本基礎心理学会理事長/東京大学大学院教授)

池田まさみ(十文字学園女子大学准教授)

原澤賢充(NHK放送技術研究所)

司会・進行 北崎充晃(豊橋技術科学大学大学院准教授)

石金浩史(心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

主催：専修大学社会知性開発研究センター/心理科学研究センター
 共催：日本基礎心理学会 協賛：日本バーチャルリアリティ学会

聴講無料

◆お申込み・お問合せ

件名を「11/27心理科学シンポジウム」とし、①氏名(ふりがな)、②郵便番号、③住所、④電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまたはFAX番号までお送りください。

■申込み締切：11月18日(金)



専修大学社会知性開発研究センター事務局

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

E-mail:socio@acc.senshu-u.ac.jp TEL.044-911-1347 FAX.044-911-1348

※お申込み時にいただいた個人情報は、専修大学からのお知らせや連絡、または個人が特定できないようにして統計処理等を行う目的で使用します。



文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
平成23年度選定事業

融合的心理科学の創成：心の連続性を探る

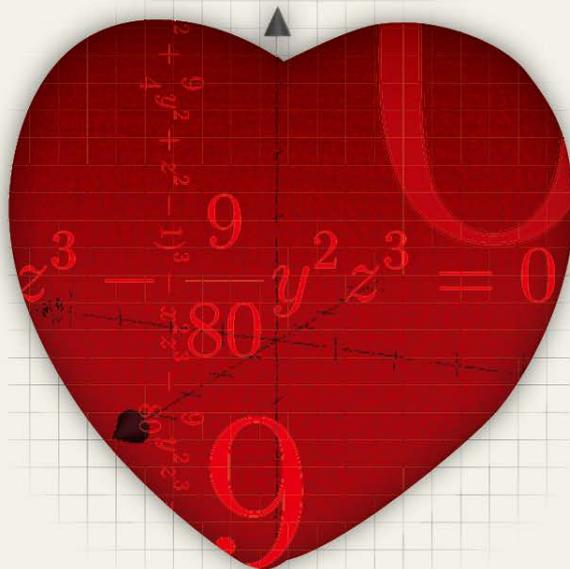
心理科学研究センター 平成 23 年度 第 2 回シンポジウム

『心理学における 効果の大きさとばらつき』

平成24年**2月25日**(土)
13:00～17:45(受付12:30～)
専修大学生田校舎 10号館1階 **10103教室**

定員
200名
(先着順)

参加
無料



上映 13:00～14:15
The PHD Movie ※英語での上映となります。

研究報告 14:30～14:45
大久保 街亜 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)
「心理学における統計改革(1)」

14:45～15:00
岡田 謙介 (心理科学研究センター研究員/専修大学講師)
「心理学における統計改革(2)」

15:00～15:15 ー質疑応答ー

講演 15:15～16:00
井関 龍太 (日本学術振興会特別研究員(PD)・京都大学)
「実験心理学者にとっての効果量」

16:15～17:00
山形 伸二 (独立行政法人 大学入試センター特任助教)
「行動遺伝学からみた効果量
ー遺伝子と環境はどのように個性を生み出すかー」

17:00～17:45
奥村 泰之 (独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター-外来研究員)
「検定力分析と標準化効果量を超えて
ー正確度分析と非標準化効果量ー」

司会・進行 **岡田 謙介** (心理科学研究センター研究員/専修大学講師)

主催：専修大学社会知性開発研究センター/心理科学研究センター 協賛：日本行動計量学会

お申込み・お問合せ

件名を「2/25心理科学シンポジウム」とし、①氏名(ふりがな)、②郵便番号、③住所、④電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまたはFAX番号までお送りください。

■申込み締切:2月20日(月)



専修大学社会知性開発研究センター事務課

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
e-mail:socio@acc.senshu-u.ac.jp TEL:044-911-1347 FAX:044-911-1348

※お申込み時にいただいた個人情報は、専修大学からのお知らせや連絡、または個人が特定できないようにして統計処理等を行う目的で使用します。



■ 向ヶ丘遊園駅(小田急線)北口より「専修大学前」バス(「あざみ野」行き)バスで約10分→
専修大学120年記念館前下車 徒歩3分
■ 向ヶ丘遊園駅(小田急線)南口より徒歩14分
■ あざみ野駅(東武東上線)南口徒歩14分より向ヶ丘遊園駅(バス)バスで約35分→専修大学120年記念館前下車 徒歩3分

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
平成23年度選定事業

融合的心理科学の創成：心の連続性を探る

心理科学研究センター 平成24年度 第1回シンポジウム

『不安、うつ、妄想に挑む心理学： 臨床と基礎の融合を目指して』

平成24年 **6月16日**(土) **13:30~17:10**(受付13:00~)
専修大学生田校舎 10号館1階 10101教室

定員
200名
(先着順)

聴講
無料

研究報告

—13:30~14:00—

大久保 街亜

(心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

「臨床と基礎：実験心理学からのアプローチ」

講演

—14:10~14:55—

金井 嘉宏

(東北学院大学准教授)

「社交不安障害の認知行動療法に活かす基礎研究」

—15:00~15:45—

国里 愛彦

(早稲田大学助手)

「うつ病と意思決定：計算論的臨床心理学からみたうつ病」

—15:50~16:35—

浅井 智久

(千葉大学/日本学術振興会特別研究員SPD)

「妄想・幻覚と自他の表象：基礎から臨床へ、臨床から基礎へ」

指定討論

—16:40~17:10—

長田 洋和

(心理科学研究センター代表/専修大学教授)

司会・進行 大久保 街亜(心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

主催：専修大学社会知性開発研究センター/心理科学研究センター

お申込み・お問合せ

件名を「6/16心理科学シンポジウム」とし、①氏名(ふりがな)、②郵便番号、③住所、④電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまたはFAX番号までお送りください。

■申込み締切：6月8日(金)



専修大学社会知性開発研究センター事務課

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

e-mail: socio@acc.senshu-u.ac.jp TEL: 044-911-1347 FAX: 044-911-1348

※お申込み時にいただいた個人情報は、専修大学からのお知らせや連絡、または個人が特定できないようにして統計処理等を行う目的で使用します。



文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
平成23年度選定事業

融合的心理科学の創成：心の連続性を探る

主催：専修大学社会知性開発研究センター／心理科学研究センター

平成24年度 国際シンポジウム

Expansion of associative learning theory

平成24年**11月10**日(土) 14:00～17:00 (受付13:30～)

専修大学神田校舎 7号館3階 731教室 東京都千代田区神田神保町3-8

定員
180名
(先着順)

聴講
無料

使用言語は英語です

— 趣旨説明 —

14:00～14:10

澤 幸祐 (心理科学研究センター研究員／専修大学准教授)

Introduction; associative basis of cognition
in animals and humans

— 講演 —

14:10～15:10

Robert A. Rescorla (ペンシルバニア大学名誉教授)

Measuring changes in associative learning

15:20～16:05

中島 定彦 (関西学院大学教授)

Information variables in Pavlovian conditioning preparations:
One more piece of evidence

16:10～16:55

鮫島 和行 (玉川大学准教授)

Neural basis of conditioning and reinforcement learning:
A mechanistic perspective on learning and decision

司会・進行 澤 幸祐 (心理科学研究センター研究員／専修大学准教授)

共催：玉川大学グローバルCOEプログラム「社会に生きる心の創成」・日本動物心理学会



お申込み・お問合せ

件名を「11/10心理科学シンポジウム」とし、①氏名(ふりがな)、②郵便番号、③住所、④電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまたはFAX番号までお送りください。

■申込み締切：11月2日(金)

専修大学 社会知性開発研究センター事務課

e-mail: socio@acc.senshu-u.ac.jp TEL:044-911-1347 FAX:044-911-1348

※お申込み時にいただいた個人情報は、専修大学からのお知らせや連絡、または個人が特定できないよう統計処理等を行う目的で使用します。

会場案内

- JR線水道橋駅
西口より徒歩7分
- 地下鉄九段下駅
5出口より徒歩3分
- 地下鉄神保町駅
A2出口より徒歩3分



文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業平成23年度選定事業

融合的心理学の創成：心の連続性を探る

心理科学研究センター 平成25年度国際シンポジウム

Development and current situations of Cognitive Behavioural Therapy for children and/or persons with disabilities

— 障がい児・者への認知行動療法 基礎研究から応用実践へ その発展と今 —

日時 平成25年 **8月31日** (土)
13:30～17:15 (受付13:00～)

会場 専修大学神田校舎 7号館3階 731教室

定員 **150名**
(先着順)

聴講 **無料**

使用言語 **英語**
(通訳なし)

◆司会・進行：長田 洋和
(心理科学研究センター代表/専修大学教授)

◆趣旨説明

13:30～13:35

長田 洋和 (心理科学研究センター代表/専修大学教授)

◆基調講演

13:40～14:40

Jennifer Cullen(CEO of SYNAPSE Inc./
Associate Fellow of Australian College of
Health Service Management)

"SYNAPSE's efforts and
achievements for children and
persons with disabilities"

◆研究報告

14:45～15:30

岡村 陽子 (心理科学研究センター研究員/専修大学准教授)

"A practice of neuropsychological rehabilitation
for the elderly with acquired brain injury"

15:40～16:25

国里 愛彦 (心理科学研究センター研究員/専修大学講師)

"Neural mechanisms of Cognitive Behavioral
Therapy for depression"

16:30～17:15

長田 洋和 (心理科学研究センター代表/専修大学教授)

"Literacy of developmental disorders in
Japanese general population"

※17:15以降はフリーディスカッション・質疑応答のお時間とさせていただきます。

主催：専修大学社会知性開発研究センター/心理科学研究センター 後援：オーストラリア クイーンズランド脳損傷協会「シナプス」



お申込み・お問合せ

件名を「8/31心理学シンポジウム」とし、①氏名(ふりがな)、②職業・所属、
③郵便番号、④住所、⑤電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまたは
FAX番号までお送りください。

■申込み締切：8月26日(月)

専修大学 社会知性開発研究センター事務課

e-mail: socio@acc.senshu-u.ac.jp TEL: 044-911-1347 FAX: 044-911-1348

※お申込み時にいただいた個人情報は、専修大学からのお知らせや連絡、または
個人が特定できないようにして統計処理等を行う目的で使用します。

会場案内

神田校舎住所 東京都千代田区神田神保町3-8



●JR線水戸橋駅
西口より徒歩7分

●地下鉄九段下駅
5番出口より徒歩3分

●地下鉄神保町駅
A2出口より徒歩3分

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 平成23年度選定事業

融合的心理学の創成：心の連続性を探る

心理科学研究センター 平成25年度 第2回シンポジウム

『生理心理学の フロンティア』

趣旨説明

14:00～14:05

石金 浩史 心理科学研究センター研究員/
専修大学 准教授

基調講演

14:10～15:10

立花 政夫 東京大学大学院 教授

「網膜における視覚情報処理
—受容野概念をめぐって—」

講演

15:20～16:05

岡田 隆 上智大学 教授

「記憶の日内変動を司る
生理心理学的基礎を求めて」

16:10～16:55

小林 克典 日本医科大学 准教授

「抗うつ作用の
基盤としての海馬神経脱成熟」

研究報告

17:00～17:15

石金 浩史 心理科学研究センター研究員/専修大学 准教授

主 催：専修大学社会知性開発研究センター/心理科学研究センター

共 催：日本基礎心理学会

平成25年 **11月10日** (日)
14:00～17:15(受付13:30～)

専修大学神田校舎
7号館3階731教室

**参加
無料**



ウェブサイト・お申込み・お問合せ

■シンポジウムウェブサイト（申込みフォームもございます）
http://www.senshu-u.ac.jp/research/lab/sidrc/h25event_sidrc/20131110.html

■申込み締切：11月4日（月）
件名を「11/10心理科学シンポジウム」とし、①氏名（ふりがな）、②職業・所属、③郵便番号、
④住所、⑤電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまたはFAX番号までお送りください。



専修大学社会知性開発研究センター事務課
e-mail:socio@acc.senshu-u.ac.jp TEL:044-911-1347 FAX:044-911-1348

※お申込み等については、個人情報保護法に基づき、専修大学からのみ開示させていただきます。また、個人が特定できないようして統計処理等を行う場合があります。



ACCESS MAP 神田校舎住所 東京都千代田区神田神保町3-8

- 有楽町線水戸橋駅
西口より徒歩7分
- 地下鉄丸の内線
5番出口より徒歩3分
- 地下鉄神保町駅
A2出口より徒歩3分

